



特攻

平成12年2月

第42号

〒105-0001 東京都港区
 虎ノ門3-6-8 第6森ビル
 財団法人 特攻戦没者
 慰霊平和祈念協会
 電話 03(3432)1090

編集人 田中賢一
 発行人 木村元正

十二月八日の歴史

旧臘八日大東亜戦争忠魂顕彰会
 (代表は特攻協会の相談役金城和彦氏)

は靖国神社で五十八年祭を実施した。
 この会報では26号(8年2月)、30号
 (9年2月)、38号(11年2月)と何回
 も紹介した。それらの記事では忠魂顕
 彰会の主眼するところを紹介すると共
 に、我々としてこの日を如何に捉える
 かを論述した。即ちこの日を記念し大
 東亜戦争の原因を再確認し、往時の指
 導者の苦悩と国民精神の昂揚を現世の
 鑑としてと述べてきた。今回は同じ
 ことを重ねて述べるのも能ないこと
 なので、国民が開戦を如何に受けとめ
 たかを、文学の面で眺めてみることに
 する。それは単に我々の懐古の情を満
 たすだけでなく、当時国民に浸透して
 いた愛国心を現世の鑑とせよと訴える
 ものである。

日本のもつ最も好きなもの

作家・著書に「奔流」
 「あらくれ」他

徳田 秋声

対米英戦争の開始とともに、太平洋
 における我が海軍の迅速果敢の行動と、
 すばらしいその成果を耳にした時には、
 支那事変の進展とともに米英から受け
 た脅威が大きく、日米会談が暗雲低迷
 の裡に荏苒八ヶ月を経過し、戦争か平
 和かの危機に立っていたものだけに、
 その感動も亦一入であった。マレー沖
 における英国砲艦の轟沈と、米国砲艦
 の拿捕が、すでに日米会談の雲行きに
 一喜一憂していた我々の気持ちを引き
 締めるのに十分であったのに、英艦レ
 パルス号と世界一を誇ったプリンス・
 オブ・ウェールズ号の轟沈に至っては、
 更に我々の舌を捲かしめるものがあり、
 これは神業か奇蹟かと疑わしむるくら
 いであった。

目次

| | |
|---------------|----|
| 十二月八日の歴史 | 1 |
| 特攻隊員の日記② | 3 |
| 騎兵出身の特攻隊員① | 5 |
| 忘れ難い人たち 回天④ | 8 |
| 原町飛行場の慰霊碑と慰霊祭 | 10 |
| 小丸川殉戦碑と榊原大尉 | 15 |

| | |
|---------------|----|
| 特攻隊員の手紙① | 16 |
| 姫路海軍航空隊跡の碑除幕式 | 17 |
| 映画上映会の報告 | 18 |
| 若潮会関東支部慰霊祭と総会 | 19 |
| 回天追悼式 | 20 |
| 特攻会報総目録 | 21 |
| 事務局より | 17 |

勿論これには涙ぐましい幾多の犠牲
 のはらわれたことは、簡単な発表を聞
 いた瞬間直ちに推察されたことであり、
 長い間の軍の惨澹たる苦心、人力を絶
 した悲壮の訓練のあったことも、次か
 ら次へと報告され、戦いは真に勝つの
 日に勝つにあらず、年来の隠忍刻苦の
 賜であることが思い知らるるに至り、
 我々が眠っている間に、今日の戦争の
 準備が、いとも周密に整えられつつあ
 たことがわかったのであり、それは決
 して神業でも奇蹟でもないことが明ら
 かになった訳である。人事の至極を尽
 くしたところに、神に近い仕事ができ
 るという実証にはなるが、人力はやは
 り人力であることを、我々は銘記しな
 ければなるまい。

圏確立という、近衛内閣時代からの大
 いなる抱負理想が、支那事変完遂とい
 う題目とともに、あのままでは実現頗
 る困難と思われ、官民ともに頭脳を悩
 ましめいていた問題であっただけに、
 その腹背に絡みついている英米の東洋
 における勢力圏を、わずか数日——適
 切に言えばわずか数時間にして、切り
 取ってしまった大手術のメスの鋭さに
 は、まことに驚嘆すべきものがあり、
 爾來ひきつづき鬼神のごとき勇猛心を
 揮い起こしつつ、堅固無比たるべき敵
 の防備を突破しつつある陸軍の奮闘振
 りを想像せざるを得ない。戦果の速か
 なのを見て、徒らに敵の防備と戦闘力
 が薄弱なためだと考えるなどは、おそ
 らく大早計であり、犠牲の大きいこと
 も、想像に余るものがあるう。

(中略)

(以下略)

これら英米の東洋侵入の根強い拠点
 の、軍事上経済上の彼我の得失利害は、
 すでにそれぞれの専門家によって説明
 された通りであるが、私は大東亜共栄

今次戦争とその文化的意義

長 与 善 郎

作家・文芸評論家・

著書に「青銅の基督」

「最澄と空海」他

生きていけるうちにまだこんな嬉しい、こんな痛快な、こんなめでたい目に遭えるとは思わなかった。この数ヶ月と言わず、この一、二年と言わず、我らの頭上に暗雲のごとく蔽いかぶさっていた重苦しい憂鬱は、十二月八日の大詔渙発とともに雲散霧消した。これは口に体のいい人道や世界平和をとなくて、肚に暴慢なみにくい野望をいだく民主主義国大統領の偽善にみちた人気取りの演説とはわけが違ふ。実にその美わしい御天性として人類文化の調和と、世界秩序の改正と、そのための東亜の和平共栄とを日夜御衷心より念願したまわれた仁帝の下された宣戦の詔勅である。しかも一時その急激なるに驚いた我らが、直ちに疑惑と不安とを絶して何か心のさばさばと軽くなるのを覚えた時には、すでにアメリカ太平洋艦隊はこっ葉微塵に全滅されていた。これではこの聖戦がこれからであると百も承知しつつ、ともかくも万歳を叫ばずにはいられない。

ば憶病であった。我らの前と支那事變の解決とはこの決戦の一途あるのみであり、しかしやれば十中八九かくの如くあるべきことはとうに判っていたことである。それを君らが怯懦のためには徒らにあれがこれがと危惧し、英・米を畏怖し、明白すぎる必至の運命に断を下す勇氣と明とを欠いていたためにシंगाポールその他の敵の防禦をしてかくの如く堅固ならしめたのだ、と。我らはそれに対して子供らしい皮肉をもつて弁解はしまし。おそらくそんな必要があるほど、眞の憂国者なら誰も無反省ではあるまい。又もし本当に神のごとき先見の明があり、手柄のある人なら、我らのともかくも厚き責任感に出でたる憂慮を決して謂われなき取り越し苦勞であつたなどとして己一人を誇りともすまい。何はともあれ万歳であつた、御同慶である、と今は国民一齊に手を取り、あらゆる国論はすべて一つの憂国の情に出でたものとして許し合つて、仲よく一致団結し、ますます兜の緒を締め、最後の勝利に備うべきである。

理を尽くしてわが当然の必要を主張し、しのびうる限度まで譲つて平和につとめ、しかも先方が尚もそれを蹴つて理不尽を強要した顛末を日本全國民と全世界とに明示したことが、わが一億同胞をして眞に憤激せしめたとともに、外交的にも成功であつた。

(中 略)

人はよく元寇における時宗の大勇猛心、莫妄想の断を讃える。それはいくら讃えてもいい。しかし当時日本の運命を一身に背負う独裁的責任者たる地位にあつた彼の英断は、決して己一個の主観的安心のみによって下されたのではない。それは実に彼の心境と並行して日本の国力、人心が彼の祖先秦時時類の比類ない勤儉尚武の善政、民力休養の賜物としてわが国未曾有という程に充実していた客観的情勢を彼がよく認識し、今なら蒙古の大軍襲来にも負けはしないという確信が、彼自身への主観的自信とびつたり符合合致した所によつたものであつたことを見逃してはならない。けだし時宗がどれ程一身として妄想を払いえたにしろ、藤原期の中・末期や、後の応仁時代の日本国情であつたとすれば、彼はけつして無謀に蒙古の使者を斬りはしなかつたであろう。我々は彼が決して簡單なる英雄型の強がりではなく、いかに内省的

十二月八日

室 井 犀 星

なインテリであつたかという事実を、その遺著「道のくさぐさ」の中に十分に窺い知ることが出来る。

(以下略)

何かを言いあらわそうとする者
 何かをつくり
 何かをえがき
 何かをいかにわせない者
 よろこびの大きさに打たれて
 ここで癡乎として喜んでる者
 よろこび過ぎて言葉を失つた瞬間
 人ははじめて自分の我欲をなくし
 何とかして
 偉大な喜びをあらわしたいとあせる
 勝利を自分のものにするのは勿体ない
 それを何かで表したい、
 何かをつくり上げたい
 絵も彫刻も音楽も
 そして文学も勝利にぶら下がる
 何かをつくり
 何かをえがき
 自分よろこびを人に示したい
 自分も臣の一人であり
 臣のいのちをまもり
 それゆえに寿をつくり上げたい、
 非才いま至らずなどは言わない、
 この日何かをつくり
 何かをのこしたい、



三浦 恭一
 自昭和十九年一月一日
 至昭和十九年十月十日
 昭和二十年一月八日戦死
 (リンガエン湾)
 皇魂隊隊長
 陸士五十六期(陸士卒業後航空転科)

特攻隊員の日記②

「原町戦没航空兵の記録」より

文学の徒の一人としてそれをなし遂げたいのだ。

時しもあれ大みことのりは降りたり肉むらゆらぎ命の激つ (吉植庄亮)

街路樹の落葉強くふみしめてもだしあゆみぬ十二月八日 (加藤順三)

何なれや心おごれる老太の耄碌国を撃ちてしやまん (斎藤茂吉)

ますらをやひとたびたてばイギリスのしこのくろぶねみづきはてつも (会津八一)

以上「日本戦争文学全集」4(集英社)より

(昭和十九年一月起)

北辰) 数片ノ所懐
 アリ 生霊ノ存スル

ニ於テ 些カ之ヲ述
 ベンカ 名シテ北辰

ト呼ブ 神国 修理固成茲ニ三千歳
 今ヤ実ニ肇国未曾有ノ時ヲ得 コノ時
 苦難衰滅ノ道カ 然ラズシテ訓練一

如 弥々皇国大進展興隆ノ機カ
 北ノ方 燦タル光明ノ星座アリ
 南ノ淵 爛タル八紘ノ光被アリ

北斗ノ光南十字ノ色 吾人一眸ノ下
 仰ガンカナ北ヲ制シ南ヲ庄シ 真ニ

大理想 皇道ノ宣布ナルノ日 我ガ民
 族ノ榮相共ニ寿カナン

光芒遍ク四界ニ亘リ 万民我ガ翼下ニ
 来リ参ズルノ秋

吾人 過去ノ一切ヲ此ノ喜ビヲ迎エテ
 何レノ地 何レノ天 满腔ノ微笑ミヲ

以テ望ムナラン
 北辰弥々輝キヲ増ス 之レ念願ナリ

以テ瞑スルヲ得 此処於テカ自ラヲ

勉メ 自ラヲ練リ以テ自ラノ最ヲ盡シ
 テ報ユルノミ

畏キハ銘肝セヨ 自己一日 北辰ニ活
 キテ絶忠 表シテ悔ナキヤ 顧ミテ恥

ナキヤ
 アア 北辰ニ生キ 北辰ニ死ス 感

激惜ク能ハズ希クハ行ヒテ断ジテ信ヲ
 失ハザランコトヲ
 十九年元旦

余ハ本年戦死仕ル
 神靈眺ニ詣ズ 粉雪 飄々タリ

我が心ニ誓フアリ
 軍人ノ生涯 僅ニ五年ナリト雖モ 陸

軍将校ノ末席ニアリ 我ガ存スルノ道
 猶遠ナルヲ覚ユ 軍人トシテ然リ

人間トシテ更ニ然リ
 先ヅ初頭ニ方リテ余ヲ戒ム

一、絶対純粹ナレ 報皇ノ二字 深シ
 広シ

二、実行第一ニシテ 論ニ情ス勿レ
 三、大ラカナル心

四、感ジテハ超タレ 気品アル将校
 一月六日

観兵式予行 举行サル
 空中ノ事象ハ予断ヲ許サザル事屢々

ナリ 航空ニ身ヲ籍リテ天ク 経験更
 ニ乏シ 訓練ノ語強シ 百難喜ビテ迎

エン
 人生ノ価値 艱難ニ際会シテ始メテ

表ハル 非凡ナルハ 平生凡シテ鋭ナ

リ 凡ナルハ 不断慢ニシテ変ニ方リ
 テ鈍ナリ

空中勤務者ハ一瞬ニシテソノ幽明異
 ナルニ於テカ 一瞬ノ持続緊急ナリ

刹那刹那ノ修養如何ハ山ノ安キニ置キ
 奉ルヲ得ン

一、枯山、落葉ノ堆クシテ 以テ明年
 ノ生氣ニ備フ 節義 廉恥 苟モ武人

天職ニ背クカラズ 思ヒテ快ナル我が
 身 碧空ノ水粒ト散リテ 純紅ノ翼染

メテ靈ト化サン日ヲ
 二、人ニ接シ温容 好ミテ争フベカラ

ズ
 明朗闊達 自己ノ現在ヲ謝スベシ

自己今日ノ地位
 上ヲ眺メテ限リナク 他ヲ顧ミテ迷

ヒ起コサズ タダ常ニ元氣 満々タル
 鬪志

況ヤ操縦桿一個 身ヲ托シテ空ヘ馳セ
 ントスルノ時

七月一日
 敵ヲ破損シ 皇国ヲ永遠ノ発展ニ導

クモノ 文字通り体当 ソハ最上級指
 揮官以下ノ結論ナリ 曰ク 一口ニ軽々

シク言ヒ切ルナレド 真ニ切実ニコレ
 ヲ遂行センヤ否ヤハ 決シテ並々ノ事

ニ属スマジ 即チ射撃シ効果ナクバ体
 当ト云フ根本ハ 更ニ一步ノ除ヲ有ス

奥行ハ深シ
 サハ言ヘ自己ノミナラズ 全員ノ境

地ヲシテ 速ヤカニ没我ノ真髓ニ徹セ
シムルヲ要ス 一瞬刹那ノ如何ニ長キ
カ又短キカノ問題ナリ

七月十八日

意思ノ鍊磨ニ就イテ

百万ノ敵ヲ恐レズトモ 心中我が意
思ヲ阻害スル敵ヲ破ルハ難シ 今迄実
ニ意志ニ屈セシコト幾ソ度 固ヨリ計
画ハ固守スベキモノニアラズ 所謂要
領良キニ趨リコレヲ翻スコト 驟雨一
過 忽チ陽光ヲ臨ムニ依リタルガ如キ
優柔不断 之レ亦アルベカラズ マ
ヅ禁止ヲアクマデ禁止トスベキ 次ハ
断行 継続 忍従 己ニ克ズシテ猶
部下ニ臨ム 何ヲ以テ將タラン
思フニ嬉シキハ 母上ノ意思ナリ
凡ソ弱キ人ハ常ニ弱キト言フベカラズ
人已ニ見捨テラルル時ハ 既ニ生ヲバ
コノ世ニ失ヒタルト思フベシ

七月十九日

一、去ル十六日 弟ノ合格ヲ祝ス 途
ハ唯一ツ 稟生十有八ノ生命ヲバ 希
ハクバ皇事ニ托セ

二、吾人が軍隊ニ人トナリテ ソノ全
機能ヲ国軍ノ生命ニ抛タントスルノ時

苟モ吾アルベカラズ 笑フベシ

何ゾ小ナルカナ 犠牲トマデハユカ
ズトモ 協調性ナキ者ハ 決シテヨリ

以上ノ益ヲ齎サザル 予等ノ日常余リ
ニモ平穩ニ馴レ 他人ノ心事ヲ推知ス

ルノ努力ニ乏シ 一考ヲ要ス
三、サイパンノ勇士 同胞遂ニ玉砕ス
悲痛極マリナシ 天哭セヨ 地鳴レヨ
吾人ノ敵愾心ヨクゾ敵一兵ヲ残サザ
ラン

七月二十日

一、將校ハ気力ニ満タザルベカラズ
体力亦気力ニ併行ス 常ニ戦場ニ思
ヒヲ致サバ 戦闘苦戦ヲ覚悟シテ懸ラ
ザルベカラズ 如何ニ真理ヲ把握シ披
瀝セントスルモ 心伴ハズ 体動かズ
指導官ハ部下ニ勝レテ強カザルベカラ
ズ 軍人ハ単才デ心臓アレバ可トハ何
時ノコト
二、今給黎中尉ノ葬儀アリ
同期生既ニ幾許ノ靈ヲ捧ゲタル 近
ク亦サイパンニ玉砕ス 希ハクバ留リ
テ我人が再奮起ヲ導カレンコトヲ

七月三十一日

予モ遂ニ飛行機ヲ壊セリ
端的ニ言ヘバ 修養ノ少クモ操縦者
トシテ欠クル所兎ニ角一人前ニ扱ハレ
ントスル頃 最モ危キカナ 要スルニ
監視ノ眼到ラズ 勢ヒ勝手トナリシ易
シ 過ギタルハ論ゼス

タダ時日ノ経過ト共ニ 忘レ易キガ
人情ニ常ナルモ特ニ中尉進級ノ前夜ニ
於テ壞シタルコノ過失ハ 将来息アラ
ン生命ノ限り 永久ニ忘ルマジ

嘗テノ教官ハ何ト言ハレタルカ

「技倆ヲ過信スルナ 準備ヲ周到ニセ
ヨ」ト 凡ソ現在ノ技倆コソ將ニコノ
言ニ当テ嵌マラザランヤ 注意シテ載
ク身ハマダ有難キナリ 自ラ注意シ着
眼ヲ定ムベシ

アア 陛下ノ飛行機ヲコノ重大ナル
危局ニ 徒ラニ消耗セシメユク コレ
程ノ不忠 何ヲ以テ補ヒ奉ラン
爾今、神カケテ願ヲ立ツ 誓フ所実
行ナクバ 以テ武人ノ名ニ恥ヂヨ 血
ヲ以テ描ケル先人ノ教ヘハ忽カニシ得
ザルモノ 我が慢心ヲタシナメシモノ
中隊長ドノハ事ナゲニ言ハレシモ
ソノ心中ヨク図ルベシ 自分ハ指揮官
ナリ 指揮官ト言フモノハ 如何ニア
ルベキカ

十月十日

航空兵ノ團結ハ 形式ト名称ニ流レ
テハ不可ナリ 之ヲ打破スルモノ各自
ニアラザルベカラズ 明日ヲ真ニ双翼
ニ担フ 撥刺青年ノ常識ヲ脱スルモノ
ナリ
ト号(特別攻撃隊)編成セラる
本部隊ノ以テ決定的ナルハ明ラカナ
リ 思ヘバ三年前真珠灣頭散華スル九
軍神 ソノ靈ハ自己ノ発動ニ基ツキ決
然純血ヲ捧ゲマツル 靖国ノ御社深ク
今日ガ拳ヲ眺メ給ハン

一局ノ動キ 懸リテ彼等ガ上ニ
任ヲ達成センカ タダ活路ヲ求ム

一途ノ彼岸 謹ミテ祈ル 亦続クベ
キ身
悠久ノ大義 微々タルカナ
天翔ケバ敵ノ頭上 一挙ノ決ヲ求ム
昨日ヨリノ境 勇躍身振ヒセル思ヒ
ハ 直チニ第一線局ノ難キヲ覆サン
コトヲ 然シ命令デ空輸トハ 然リ
而シテ一機一刻モ早クト叫ブ前線ノ
声耳ヲ打ツ
出発ニ方リ 揃ヒテ無事ナル到着ヲ
祈ル
或ハ夫レ直チニ撃敵ニ配サルルヤ
我が本懐 伏シテ謝シ奉ラン
生ヲ稟ク満二十一 紅ノ粹ヲ盡クシ
南ニ飛ブ
北辰無窮ヲ信ジツツ

昭和十九年十月二十七日 十一時

皇魂隊のマーク



騎兵出身の特攻隊員①

田中賢一

萌黄会（騎兵将校だった者の会）は毎年総会を実施している。11年度は騎兵学校幹部候補生隊9期の人達が担当して11月6日に実施した。この人達はこの際卒業後の動向について調査したところ、次の9名が航空特攻で戦死していることが判明した。

幹候9期は、ほかの予備士官学校でも同様だが教育中に大勢航空の操縦に転科した。特攻会報24号に岩田辰夫氏の調査資料が載っているが、基本操縦教育隊に入った9期生は六七〇名となっている。騎校幹候隊から航空に転科した者は、同期生の記憶によれば六五名、うち戦死は一五名、その中に特攻が九名いる。

これら特攻戦死者のうち、資料の整っているものから逐次紹介してゆくことにする。

B29に体当たり散華した

山本三男三郎少尉

新潟県出身、松山高商卒、17年10月仙台の騎兵聯隊へ入営、甲種幹部候補

陸軍騎兵学校幹部候補生隊9期出身 特別攻撃隊戦死者（判明分のみ）

| 期 | 階級 | 氏名 | 所属部隊長 | 使用機種 | 戦死年月日 | 戦死場所 |
|---|----|---------|---------|------|----------|--------|
| 9 | 少尉 | 田中 稷 二 | 一字隊 | 1式戦 | S19.12.7 | オルモック湾 |
| " | 少尉 | 粕川 健 一 | 八紘隊 | 1式戦 | S19.12.7 | オルモック湾 |
| " | 少尉 | 西尾 卓 三 | 飛行第17戦隊 | 3式戦 | S20.4.1 | 沖縄西方洋上 |
| " | 少尉 | 勝又 生 敬 | 飛行第17戦隊 | 3式戦 | S20.4.1 | 沖縄西方洋上 |
| " | 少尉 | 小野 生 三 | 誠第38飛行隊 | 98直協 | S20.4.6 | 沖縄西方洋上 |
| " | 少尉 | 北村 正 正 | 誠第36飛行隊 | 98直協 | S20.4.6 | 沖縄西方洋上 |
| " | 少尉 | 山本 三男三郎 | 飛行第4戦隊 | 2式複戦 | S20.4.18 | 福岡県上空 |
| " | 少尉 | 林 義 則 | 第105振式隊 | 97戦 | S20.4.22 | 沖縄近海 |
| " | 少尉 | 猪股 寛 | 飛行第20戦隊 | 1式戦 | S20.6.1 | 沖縄近海 |

☆ 山本三男三郎少尉はB29に体当たり、他は対艦船特攻。



回天制空隊 前列右から2人目が山本隊長



生に指定され18年5月騎校幹候隊入隊教育途中で航空転科、大刀洗飛行学校菊地教育隊や北支石家荘の教育飛行隊で教育を受けた。

小月の飛行第4戦隊で防空任務に就いていたが、19年12月、体当たり専任の回天制空隊が編成されるや、その隊長に任ぜられた。20年4月18日大刀洗西方上空で、B29に体当たり撃墜戦死するが、遺書や戦闘の様子は会報23号に掲載したので、重ねては述べない。この写真も既に掲げたものだが、再度掲載し烈士の面影を偲ぶことにする。

沖縄洋上に散華した

林 義則少尉

岐阜県出身、岐阜師範学校（二部）を出て東京農業教育専門学校に学び、秋田県鷹巣農林学校に奉職、17年10月騎兵第3聯隊に入営、甲種幹部候補生となり、騎校幹候隊に在隊中に山本少尉と同様に航空に転科、大刀洗飛行学校菊池教育隊で操縦教育を受け、満州白城子に在る第25教育飛行隊で戦闘機の訓練を受ける。19年7月1日少尉任官。その後桂木斯に在る練成飛行隊に於て訓練を受け、公主嶺に移り、少年

飛行兵の訓練を担当する。

20年3月10日、志願し特攻隊第四降魔隊長となる。後に105振武隊と名称変更。4月3日公主嶺出発九州に向かう。その後4月8日付の手紙が菊地から出され、27日には知覧に向けて出発している。

記録によれば第105振武隊林少尉以下七名は、4月22日知覧を出撃し沖繩西方洋上の敵艦船に突入となっている。使用機は九七戦である。なお同隊の他の一名は23日、二名は5月4日、二名は5月25日に撃散華している。

林少尉の言動を伝える資料は殆どない。また旧式の九七戦を駆って目標に到達できたのか、それも判っていない。しかし、我々の心を強く打つのは、林少尉と小学校同級生で将来を約束した一女性の半世紀以上も抱き続けた慕情である。その人は小栗かえでさんといって、この人の手記「愛に終わりなく沖繩の空に消えた人のみ霊に捧ぐ」という本を、此の度我が協会で上梓した。(※一、五〇〇)購読をお奨めする。ここでは序文と特に感銘深い一節だけ紹介する。

まえがき

教育も御空も共に国のため。
こんな言葉を残して空の防人となり、

沖繩の空に消えていった人よ!

月並な言葉だけれど光陰矢の如しとか、本当に歳月の経つのは早いものである。五十年と言えば長い筈であるのに過ぎてしまった今、それはとても短かかった。

五十年前のあの激しかった戦争で戦死したあの人は教育者になるために勉強したけれど時代はそれを許さず学校を卒業すると直ぐに軍隊に入り、あつと言う間に戦闘機乗りになり、特別攻撃隊長に選ばれ敵艦船攻撃の命令を受けて、沖繩の空で散ってしまった。

在世二十四年、この短い生涯の一時を存分に燃焼し尽くし、そしてこれが栄光の道だと信じて征った幸せな人生だったと思う。私がそう信じて上げなければ余りにも可哀想だから。けれど愛するものを残して死なねばならぬと思った時、どんなにか切なかったことか。

「俺が死んだら何も残らない。それがとても淋しい」と切ない言葉を遺している。一年間の手紙だけのお付き合いだったが、この短い期間に一人の女の一生を支配する程の心を持っていたあの人は、死を前にして最愛の者に遺したものの、それは何の形とてはないけれど珠玉の様な愛が遺された。命がけで愛された自分は残りの生涯をその愛と

切なかった思い出を支えとして五十年を生きて来た。「何故死んだの」と叫びつづけながら。

その遺された珠玉の愛と大切な二人の思い出を拙い私の筆で綴ってあの人の霊に捧げることにしよう。

平成十一年春

小栗 かえで

……淋しい気持ちで幾日か過した或る日、ひょっこりと、又あの人から葉書が舞い込んできた。

いよいよ今日出撃する。この期に及んで、何も言うことなし。よく尽くしてくれたお前の心を大切に持ってゆく。君ありて我れ幸せなりし。体を大切に静かに平和に暮してくれぬことを祈る。では、四月二十二日

鹿児島県川辺郡知覧町

林隊 義則

遺骨をお迎えして何日かしてから、村葬が行われた。立派な祭壇の上に、白い箱と遺影を飾りその前に、一年を経て還り給いし君の御魂(ごたま)全身をもて 抱き参らす

待ち侘びし御魂還る日近ければ

心粧いぬ悲しみに堪へて

我を遺きて遂にゆきしか我を遺きて

武士道とふものはかくも悲しき

この三首を短冊に書いてお供えした。あの人の家は村でもずっと山奥で、あの当時歩くより方法のないところを、村の皆様が大ぜい参列して下さった。

終戦後だったので、外地からの復員者や南方の小さな島にとり残され消息不明だった海軍の人も、無事お帰りになつて、お参り下さったことを覚えていて。読経も終り最後の導師様が引導を渡すその御言葉の中に「楓さんの胸に抱かれ」の言葉があり、どきっとしながら、ひっそりと参列者の後の方に立っていた。最後の御焼香をすませ、家の近くの山の墓地に送って行った。激しかった生涯をやりやと静かな眠りにつくことができたのである。戒名「淳篤院義忠知居士」となり、これからはあの世の住人になるのか……

この本はこのような珠玉の文でちりばめられているが、引用はこれまでとする。手にとつて読んで頂きたい。

忘れがたい人たち

回天④

塚本 太郎

小灘 利春

略歴

東京都、慶応大学、兵科四期予備士官、回天搭乗員。

回天特攻第二陣の金剛隊伊四八潜で出撃、カロリン群島ウルシー環礁の敵泊地に突入して戦死。

慶応在学中、雨中行進で知られる昭和一八年一〇月二二日の明治神宮外苑競技場での出陣学徒壮行大会に参加したのち海軍に入隊し兵科四期予備学生となった。水雷学校の魚雷艇専修学生から志願して一九年九月、回天搭乗員となり第一特別基地隊大津島分遣隊に着任、操縦訓練に入った。

体格が立派で背が高く、色白でもあ



るので、搭乗員一同が研究会や食事でも顔を揃える大津島の士官室ではいつも目立つ存在であった。

慶応時代は水球部員で、名ゴールキーパーとして人に知られていた。持ち前の強健な身体の上に研鑽を重ね、壁が立ちふさがるような立ち泳ぎで次々とゴールを襲うシュートを跳ね返して守り抜き、味方を勝利に導いたと言われる。

その彼、塚本太郎少尉は回天特別攻撃隊の第二陣金剛隊の編成にあたり、四期予備士官の先頭を切って出撃搭乗



金剛隊伊48潜 前列向って右から2人目塚本少尉

員に選ばれた。最新鋭の伊号第四八潜水艦に乗り込み昭和二十年一月九日大津島基地を出撃、敵の大艦隊が集結するウルシー泊地に向かった。

指令どおり一月二二日の黎明時、四基の回天が発進して敵泊地に突入したことは、同日早朝、米軍指揮官が警戒警報を発令したのを傍受しているのが確実と判断されるが、母潜水艦が未帰還となったので状況は不明である。

伊四八潜は二日夜になって同島西方で敵飛行機に発見され、駆逐艦群の執拗な追跡、爆雷攻撃が続き、二三日午前、遂に沈んだ。

彼は戦争中の当時、レコードに自分の肉声を吹き込んで遺していた。先年遺族が偶然発見し、NHKテレビでも放映されたが、祖国日本に生命を捧げる真情とともに、父母、弟妹への切々たる愛情を吐露し、「さようなら」と別れを秘かに告げていた。

東京都北区田端の実家は戦災に遇っていたが、両親は焼け跡に近所の支援もありその頃としては立派な風呂屋を開業し「太郎湯」と名付けた。入り口には彼のモットーであった「己のためには汗を流し 人のためには涙を流せ」の言葉に、「皆さんの汗は太郎湯で流す」と加え掲げられた。

ゴールキーパー姿のレリーフが後に

水泳部の仲間たちによって贈られ、太郎湯の番台の上を飾った。このレリーフは現在、日吉の母校慶応大学水泳部の合宿所に置かれ、後輩たちを見守っている。

没後海軍大尉に特進、また功三級金鷄勲章、勲五等雙光旭日章を授与された。彼が折りにふれて家族に書き送った手紙に記された数多くの短歌、俳句は、現在も種々の刊行物に掲載され、彼の名をこの世にとどめている。

工藤 義彦

大分県、大分高商、兵科三期予備士官、第一特別基地隊大津島分遣隊。回天特攻第一陣の菊水隊で出撃したが発進できず、次の金剛隊伊58潜で再度出撃、ガム島アラ港に突入、戦死。没後少佐。



兵科第三期予備学生を志願して海軍に入り、水雷学校魚雷艇学生となって長崎県の川棚臨時訓練所で艇長訓練を重ねたのち、更に必死必中の新兵器要員の募集に応えた一群の士官たちがいた。その中から一四名が選ばれて最初の子備士官搭乗員となった。

彼らは昭和19年9月1日、山口県大津島基地に着任、回天の搭乗訓練に入った。その一人、工藤義彦少尉は遺影から偲ばれるように凜然たる若武者の風貌と、がっちりした体格の持ち主であった。

秘密部隊の我々には出撃者を送る壮行会以外、上陸の機会が減多になかったが、或るとき徳山市内の旅館「松政」で一夕の宴があつて、工藤少尉が舞台上がり尺八を演奏した。羽織袴の正装を整え、端然と座った姿は風格と威厳があり、流石は九州男児、なかなか立派なものであった。

ひそかな会合なのに、品のよい和服姿の若い女性が傍らで伴奏の琴を弾いた。旅館からお願した人か、或いは彼自身の知り合いだったのか。出撃を控えた我々特攻隊員には味わうことのない落ちついた雰囲気であり、日本の伝統美に浸るひとときであった。

工藤少尉は回天隊最初の出撃、菊水隊に選ばれて伊号第36潜水艦搭載の回

天搭乗員となり昭和19年11月8日大津島を出撃、カロン諸島の米艦隊集結地ウルシー環礁へ向かった。その前短い休暇を許されたが、遠く大分県に帰る工藤少尉のため往復の時間を短縮してやりたいとの配慮から、大津島分遣隊指揮官板倉光馬少佐は隊の水上機を出して自宅に近い海岸まで送った。

工藤少尉には許嫁がいた。基地へ戻るとき別府の海岸に「振袖姿もあやかな、目のさめるように美しい許嫁が、母親とともに見送りに来ていた」と出迎える水上機操縦員は記している。

伊36潜は11月20日未明、ウルシー泊地に接近した。発進を前にして工藤艇は浸水が起こり中止。少尉は艦長に発進命令を迫って嘆願し、絶叫したが許されず、帰還した。続いて編成された金剛隊に、中尉に進級して伊号第58潜水艦に乗り、隊長石川誠三中尉、森松、三枝直両二飛曹とともに12月30日大津島を出撃、1月12日グアム島アブラ軍港の在泊艦船を攻撃して散華した。

戦没した回天搭乗員のなかに妻帯者が二人いた。婚約者や恋人がいた搭乗員は少なくないであろう。工藤少尉は「死ぬことがわかってはいる特攻隊を志願した身で、結婚してはあの人に申し

訳がない」と、仲間うちに語っていた。戦局苛烈のおり、少尉の身で飛行機に

一人で乗せて貰い往復する帰省が何を意味するのか、工藤少尉は一切告げなかったようである。

明るく振る舞う別れの挙手の礼のなかに、最愛の人と今生の別れを告げる心の奥底の、叫びたいほどの激しい切なさがあつたであろう。

水雷学校出身の三期兵科予備士官搭乗員は一四名のうち一〇名が戦死した。回天戦の最初から次々と出撃してゆき、散華した勇士たちであるのに、回天について記す出版物は多々あつても、彼等が語られることは少ない。初期の搭乗員の殆どが戦死してしまつたためもあるが、埋もれるに忍びない事柄が多いように思われる。

全国回天会々々長 小灘利春

碑 文(側 碑)

大東亜戦争 年ヲカサネテ苛烈ヲ加ヘ
物量漸ク乏シキヲ告ゲテ 前途暗澹ヲ
リシ時 愛国ノ至誠 弱冠ニシテ早ク
モ危急ヲ豫感シ 忠孝ノ純情 一身ヲ
献ジテ狂瀾ヲ既倒ニ回サントシ 前代
未聞ノ兵器 必死必勝ノ戦法ヲ創案シ
テ 従容自ラ之ヲ操縦遂行セシモノ即
チ是レ回天ノ勇士ナリ 惜シイ哉時
既ニオソク 戦勢ヲ一転セシムルニ至
ラザリシト雖モ事敵ノ意表ニ出デテ其
心膽ヲ寒カラシメ ヨク皇国ノ命脈ヲ
危殆ノ中ニ護持セシモノ 其ノ功偉ナ
リト言フベシ ココニ回天献身ノ勇士
ノ氏名ヲ録シ 以テ芳ヲ千秋ニ伝フ



大津島基地 回天碑

原町飛行場の

慰霊碑と慰霊祭

特操1期
少飛13期(襲撃)

一柱 一九柱 (明野校時代)
二柱 一三柱 (明野校時代)
三柱 一二柱 (明野校時代)
四柱 一三柱 (明野校時代)
五柱 一三柱 (明野校時代)
六柱 一三柱 (明野校時代)
七柱 一三柱 (明野校時代)
八柱 一三柱 (明野校時代)
九柱 一三柱 (明野校時代)

第86期召集下士官48名
少飛第9期重爆班28名
編成、二式双襲12機、24日鉾田発、9
機10名は12月7日、バゴロド発進オルモツ
ク湾の敵艦に突入、3機3名は12月10
日レイテ湾の敵艦に突入。

皇華隊
進襲隊
皇魂隊

比島に渡った特攻機整備員
特攻武烈隊
第45振武
第63振武
第64振武
飛行第65戦隊

一柱 一三柱 (水戸校時)
二柱 一三柱 (水戸校時)
三柱 一三柱 (水戸校時)
四柱 一三柱 (水戸校時)
五柱 一三柱 (水戸校時)
六柱 一三柱 (水戸校時)
七柱 一三柱 (水戸校時)
八柱 一三柱 (水戸校時)
九柱 一三柱 (水戸校時)

航空関係だけを見ても、沖縄作戦時
の南九州における発進基地や、飛行兵
の教育機関の在った場所には、慰霊碑
や顕彰施設がある。原町陣ヶ崎公園墓
地にある慰霊碑は、原町飛行場関係戦
没者の慰霊碑であるが、その対象とし
ている戦没者は、この飛行場で教育を
受けた者、ここで編成または戦力回復
を行った部隊など極めて多岐に亘る。
教育を受けた者と言っても、後で述べ
るが、この飛行場を使った実施学校は
次々と変更になり四校に及ぶ。それら
の人々が後に何部隊に属し、いつどこ
で戦死したか調べるのは容易なことでは
なかつたろう。二九六柱を掌握して
これを合祀している。関係者就中事務
局長八牧通泰氏の労に敬意を表する。
困みに合祀者数は次の通りで、この飛
場との関係は後で述べる。

原町飛行場変遷概要

飛行場の建設と開場

敷地は当時の福島県相馬郡石神村か
ら太田村(いずれも現在の現在の原町
市)にまたがる広大な地域に、昭和14
年4月から飛行場の建設が始り、昭和
15年6月に熊谷飛行学校原町分教場と
して開場した。

所管の変遷

陸士50期転科(戦斗) 二柱 昭15・6~16・1
陸士53期転科(戦斗) 一四柱 // 16・1~16・9
陸士54期(戦斗)及び教官 六二柱 // 16・9~17・7
陸士55期転科(襲撃) 七柱 // 17・7~19・5
陸士56期(襲撃) 二二柱 // 19・5以降
陸士57期(襲撃)及び教官 二二柱 此所で教育した課程
陸士58期(襲撃) 五柱 (熊校時代) 第84期召集下士官32名

駐留した飛行部隊

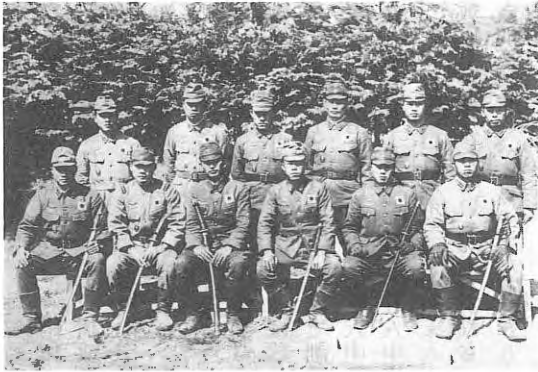
飛行第65戦隊は比島作戦で戦力喪失
し、20年1月2日戦力回復のため原町
へ移動、ここで1式戦III型に機種改編
をした。その後第6航空軍に編合され、
3月17日原町を去って日達原に移動し
た。

特操4期 15名 皇魂隊 鉾田教導飛行師団で11月16
日編成、二式複戦。12月初原町出発、
20年1月6日、8日、10日に分れ5機
5名がクラーク発進、リンガエン敵艦
に突入。

第45振武隊 鉾田教導飛行師団で20
年2月14日編成、二式複戦。5月28日
知覧を発進、沖縄西方洋上の敵艦に突
入、10人全員原町ゆかりの人。

原町で編成又は訓練した特攻隊
勤皇隊 原町で訓練中の航士56期、
第63振武隊 鉾田教導飛行師団で20

原ノ町の面影



63振武



進襲隊



64振武



伝統行事馬追い



←左の写真は第64振武隊員が宿舎松浦家に伝わる具足をつけて撮ったもの

年3月23日編成となっているが、編成地は原町、99襲、6人が6月7日万世発進、沖繩西方の洋上へ。

第64振武隊 4月1日63振武と同様原町で編成。99襲、9人が6月11日万世発進。

赤心隊 沖繩の第32軍直轄の独立飛行第46中隊で編成、98直協、3月27日と28日に突入したが原町ゆかりの3人が含まれている。

慰霊碑建設の経緯 建立の発端

かつて鉾田飛行学校の分校として、原町で教育を受けた航士57期生は35名中生き残りは13名だった。昭和45年春その13名中9名が集り、原町の公園墓地で同期戦死者の慰霊祭を行った。そのとき慰霊碑を建立し、関係のある全戦没者の慰霊祭を行い度という要望が抬頭し、地元関係者も加わり建立の計画が進められた。

慰霊碑建立成る

そのことについて昭和46年8月14日の読売新聞記事は、次の通り報じている。

飛行場後に慰霊碑

原町飛行場は昭和十五年、陸軍熊谷飛行場原町分校として発足した。その後、明野、水戸、鉾田飛行学校の分校

とかわり、終戦末期には「神風特攻隊員」の練成飛行場となった。昭和十九年秋から終戦にかけて、ここで訓練を受けた若いパイロットたちは九州の万世、知覧などの前線基地へ配置され、次々と帰らざる特攻機に乗り込んでいった。レイテ、フィリピン、沖繩など決戦場に散っていった若者の命は数かぎりなく、たとえば原町飛行場で訓練を受けた陸士五十六期生は三十人中二十

七人、同五十七期生は三十五人中二十二人、少年飛行兵十三期生四十人中半数以上が戦死している。いずれも二十歳前後の若いパイロットたちばかりだった。

慰霊碑建立の話は、昨年春、かつて同飛行場で訓練を受けた陸士五十七期生の生存者が同市に集まり、慰霊祭を催したさい「これを機会に思い出の地に慰霊碑を建てようではないか」という機運が盛り上がったのがきっかけ。陸士五十八期生の生き残りの一人である同市本町一丁目、薬局主八牧通泰さん(四六)が中心となり慰霊碑建立委員会を組織、全国に散らばっている約百人の生存者や一般市民に協力を呼びかけた。目標募金額百万円に対してこれまで市民をはじめ全国から約七百人約二百五十万円の浄財が寄せられた。

この話を聞いた山田市長もいたく感

動し、同飛行機場跡を一望できる同市陣ヶ崎の公園墓地の高台の一角をこころよく提供した。

慰霊碑は白ミカゲ石の台座に高さ二・四メートルの両側面石を立て、その間に飛行服に身を固めた等身大のブロンズ像が飾られた。モデルは昭和十九年十二月五日、フィリピン・サルワン島沖で散っていった鉄心隊隊長松井浩中尉(陸士五十六期生、秋田県出身)。同日の除幕式には松井中尉の母親やお姉さんも参加する。碑文も黒ミカゲ石に平泉澄東大名誉教授が筆をとった立派なもの。

この碑には同飛行場関係戦没者約二百柱の霊がまつられるほか、あす十五日は、同市民空襲物故者十一柱、全原町戦没者千四十柱の合同慰霊祭もしめやかに行われる。以上読売新聞社記事

平泉澄先生の碑文

コノ地ハ曾テ陸軍原町飛行場ノアリシ所 昭和十五年以来コノニ育成セラレシ幾多ノ勇士ハ国難打開ノ為ニ敢然トシテ各地ニ戦ヒ ヤガテ戦局日ニ非ナルニ臨ンデハ進ンデ特攻隊トシテ勇名ヲ轟カシ敵ノ心膽ヲ寒カラシメタリ不幸事志ト違ヒ勇士再ビ還ラズ飛行場モ亦空襲ニサラサレ土地ノ風貌遂ニ一変スルニ至レリ 今ヤ時移リテ二十六年 往時を回想シテ悲痛言フ所ヲ知ラ

主碑とそのモデル



鉄心隊は11月8日女子奉仕隊の見送りを受けて笑顔で鉾田を出発した。先頭は松井浩中尉



碑文

又有志相計リテ碑ヲ立テ戦没ノ雄魂ヲ
慰ムルト共ニ曾テ経験セル軍民協力一
和ノ記念トシ謹ンデ祖国永遠ノ栄光ヲ
祈ル

昭和四十六年八月十五日

全国七百有志一同

碑前における慰霊祭は毎年行われて
いるが、51年には新に作られた芳名板
の除幕式も行われた。そのことを伝え
る51年11月11日の「福島民友」新聞は
次の通り報じている。

原町飛行場関係の戦争犠牲者の慰霊
祭が、合祀者芳名板の除幕式を兼ねて
十一日午前十時から原町飛行場を見お
ろせる高台の市営陣ヶ崎公園墓地の一
角でしめやかに行われる。

例年、原町飛行場関係の慰霊祭は八
月十五日に行われていたが、ことしは
朽ち果てた木製芳名板に代わる銅製芳
名板の完成を待って連休を利用、十一
日に挙行されることになったもので、
慰霊祭には芳名板の銅製化に尽力した
渡辺伸原町飛行場関係戦没者慰顕彰会
会長（医療法人渡辺病院理事長）をは
じめ、同飛行場で訓練を受け、飛行直
前に終戦を迎え、同期生らの霊を慰め
続けている八牧通泰氏（ヤマキ薬局店
主）青田信一氏（衣料品店主）それに
航空兵として空に散った二百六十五人

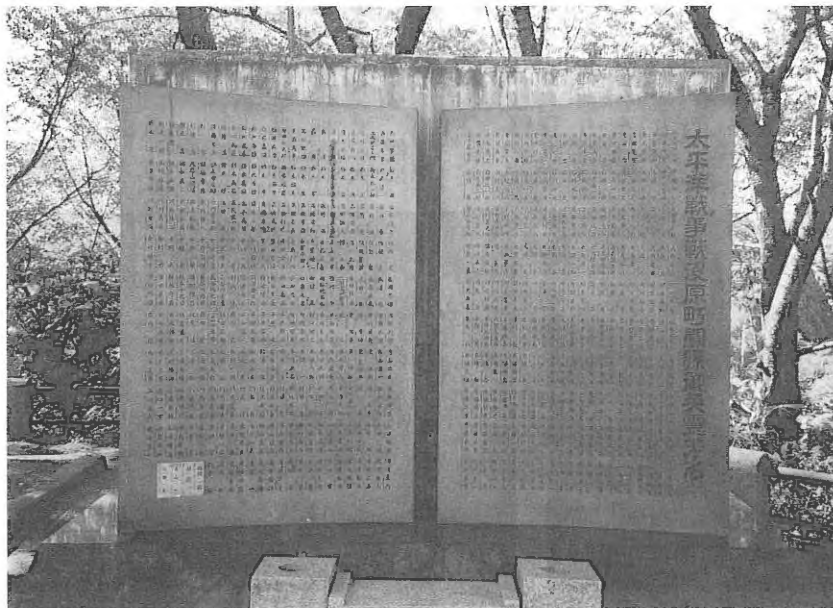
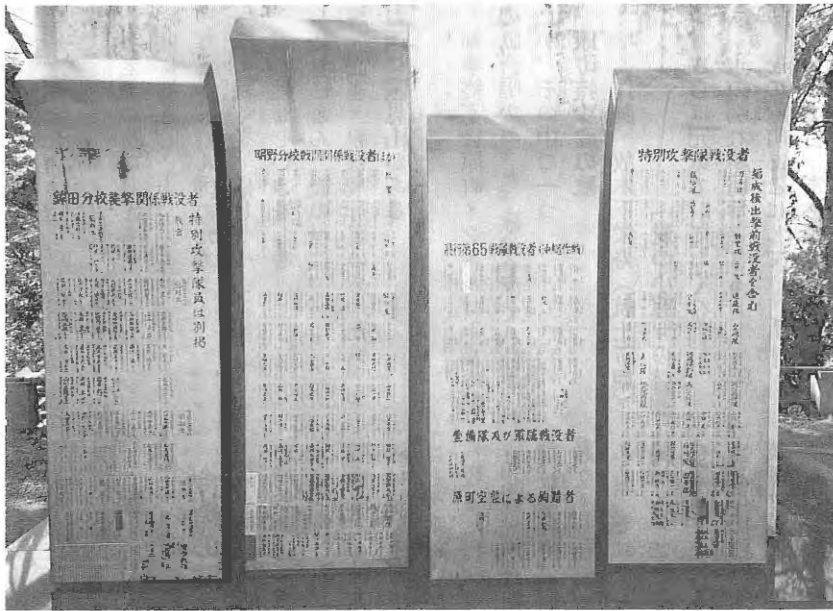
の遺族など約二百人が出席、ありし日
のわが子、夫の姿を偲び、めい福を祈
る。

飛び立っていったが、これまで確認さ
れている犠牲者は二百六十五柱。顕彰
会では去る四十六年に慰霊碑と木製の

同飛行場では53から58期生までと少
年飛行兵13期、特別操縦見習士官1期
など約五百八十人の若人が訓練を受け
完成で関係者もホッとしました様子。

合祀者芳名板を建立、霊を慰めていた
が、悲願とされていた銅製の芳名板の

左の写真は芳名板 上は飛行場関係者
波を象る。下は地元出身者のもの、本
を開いた形。



本年度の慰霊祭

田中賢一

10月10日11時40分より、碑前に設けられた祭壇に向って神式で行われた。

神職は同市伊勢大御神森鎮雄宮司(陸士58)であり、この祭典を運営したのは、八牧通泰氏以下58期の人達である。

参列者は来賓として原町市長、商工会議所会頭、福島偕行会長、それに特攻慰霊協会代表であり、飛行場関係遺族45名、地元出身戦没者遺族44名、一般参列者86名、計約200名だった。

来賓として参列した人達は、それぞれ追悼の辞を述べたが、特攻慰霊協会の代表として参列した田中は、次の歌を御祭神に捧げた。

原町飛行場縁の英霊に捧げる。

尚武の絵巻き 馬追いの
母なる基地に羽ばたきて
蹴たかき つはものが
鵬翼つらね 斗南行

嵐に向いし いくさ神
身もて護りし 大八洲

マニラの海の 赤き陽に
懐い馳せしかみちのくの
夕陽映ゆる 国見山

今宵限りと 薩南の
知覧の空に 仰ぐ月
写しまほしき思う人

幽明へだつ 半世紀
明眸皓齒 君がおも

霜鬢爛額 佇みて

手繰る月日の 糸車
雲雀ヶ原の 青き空

情 手篤き 郷の人
我老耄の身なれども
共に抱きし 志

などか忘れん国のため
後に続くを 信じつつ
君が残せしさをしを
語り伝えん 後の世に
註 雲雀ヶ原は飛行場のあった処、その西に国見山がある。

神事終了後原町メンネルコールの鎮魂歌合唱があった。歌は全部で八曲あったが、その中の一つ

原町特攻隊の歌

作詞 故木下栄寿(航士57期)

「愛の小窓」の替歌

一、さらば元気でいておくれ

永の別れが明日となる

恋の原町あとにして

夢は爆音 ああ消えてゆく

二、二度と逢えない二人なら

胸の写真がマスコット

晴れの 特別攻撃隊

君と一緒に ああ体当たり

三、見事 敵艦 沈めたら

笑って死んだとほめてくれ

晴れの感状 届いたら

会いに来てくれ ああ九段坂

四、俺が死んだと聞いたなら
泣いてくれるな これお前

白木の箱が届いたら
抱いておくれよ ああ思出し

今後の問題

以上述べた如く八牧氏を始めとする奇特な人達の御尽力で、この慰霊行事は毎年行われ、御遺族は九州、四国、関西などの遠方から参加され、その人達は常連となっていると聞くが、将来はどうなるのかという私の問に対し、八牧さんは次の通り答えられた。

「現在遠隔地から慰霊祭に見える飛行場関係の御遺族は10〜20名程度であり、も早や兄弟から甥姪に移りつつある。それでも戦死者に対しいろいろ聞かされているご一族は、後継者の名を届けてくれる。この意味で昨年「航空兵の記録」を刊行し、後継者にもご英霊の戦死状況や当時の情勢など、知ってもらおうと努力したつもりである。また昭和55年地元戦没者の御英霊を合祀し、銘版を設置したことにより、その御遺族が多数出席され、次代への継承に望みを託している。しかし問題なのは、これを取り仕切る事務局が未永く存続するかどうかという点にある」



小丸川殉職碑と 特攻隊員榊原達哉

田中賢一

宮崎県児湯郡高鍋町の北部を東西に流れている小丸川という川がある。その北岸の台上に高鍋大師と呼ばれるお堂があり、境内に古びた碑が建っている。戦争中に建てられ石の材質が悪かった為か風化が著しく、正面の「八勇士殉職之地」という文字以外は読み取れない。そこで数年前に我々縁故者が次の文面を銅版に刻み、碑の裏面にはめ込んだ。

当時殉職者の部隊葬が終ってから、榊原中尉は私費をもって慰霊碑を建てようとした。それを知った同聯隊の将校は醸金してこの碑を建立したが、この地に在った挺進部隊の者は今でも榊原中尉の建てた碑と呼んでいる。

何日行くか：の歌の作者は、殉職した伊藤中尉だと言う人もいるが、榊原だとも言われ定かではない。レイテ空挺作戦のとき、初め第4航空軍から示された目標はブラウエン地区の三つの飛行場だったが、敵航空を封殺するにはレイテ湾岸のタクロバンとドラグも降下目標にすべきであるという意見が、聯隊の中小隊長から出された。両目標

烈忠 八勇士殉職之地

- 陸軍大尉 伊藤成一
- 陸軍中尉 鈴木寛
- 陸軍准尉 川原田津留吉
- 陸軍曹長 平方國三郎
- 陸軍兵長 池本 治登
- 陸軍上等兵 杉村 博
- 陸軍上等兵 山崎茂男
- 陸軍上等兵 大森良市

昭和十八年六月十八日挺進第四聯隊では新たに所屬となった将校の実兵指揮の訓練を実施し、その中に小丸川を渡渉する場面があった。前日山間部に降った雨で河川が増水しており、押し流されて八名が殉職した。

この演習を計画した榊原達哉中尉(当時)は責任を負って自決しようとしたが、聯隊長に諭され思い止まった。翌十九年聯隊がレイテに降下するとき、榊原大尉は地上部隊と提携できる見込の全く無いタクロバン降下部隊指揮官を志願し、八名の位牌を抱いて飛行機に乗り込んだがその後の状況は詳かでない。殉職八柱の魂魄もレイテ作戦に参加したのである。碑の裏面に刻まれている歌

何日行くか何日散るのかは知らねども
今日行くか何日散るのかは知らねども

この碑は初め小丸川の堤防上に立てられたが、堤防改修工事の為昭和四十年に現在地に移された。

は地上軍の作戦目標外なので、提携できる見込みはない。特にタクロバンは敵上陸軍の中核なので、特攻隊ということで、輸送機二機、強行着陸機二機が割当てられ、人員を選出した。当時第4聯隊の本部付だった榊原大尉は、真先にその指揮官を志願した。榊原がその任に就くことについては、誰もが当然のことだと思つたという。強行着陸機は74戦隊の重爆二機で、搭乗者は第3聯隊から選出した。降下部隊の輸送機は二機で降下者は第4聯隊から選出した。その中に榊原大尉がおり、降着後両隊を統一指揮することになった。

これらの部隊の活躍については、米軍の資料を漁っても不明である。唯強行着陸機でレイテ湾に撃墜され、浮遊して捕えられた者がいる。その人達の話を総合すると、低空を飛行して、レイテ湾に浮ぶ多数の敵艦の対空砲火で全機撃墜されたと思像する。

榊原は私が挺進練習部下士官候補者隊長だったとき、聯隊から出てきた区隊長という御縁がある。小丸川殉職碑は、私にとって榊原の追悼碑のような気がする。

この現地は高鍋町だが、その北が川南町で、往時川南村に陸軍挺進部隊の基地があった。戦後建立された川南護

国神社には、地元出身の戦死者だけでなく、挺進部隊の全戦死者が祀られている。毎年11月23日には町長が祭主になって盛大な例祭が行われるが、そのことについては何回もこの会報に掲載した。参加する老兵も追々少なくなつたが、その中の何人かは毎回小丸川殉職碑に詣でて往時を偲んでいる。



碑に酒を注ぎ供養する空挺同志会会長。この人は元陸上自衛隊空挺団長で、戦後育ちであるが、史実を聞いて感動していた。



川南護国神社で国旗掲揚する自衛隊員

特攻隊員の手紙①

派に武士の子として戦って来ます。

今更に残し置くべき事もありません。唯、慈愛深き御両親に今

日迄、正明何等恩報するの事なく唯々

残念に思い居ります。二十五歳の今日

迄何不自由無く今此の光榮ある攻撃隊

の中堅將校として参加し得るの日を得

さしめ下されし御両親他皆々様の御養

育限りなく身に沁みます。

明日の出撃は勿論生還を期し得られ

ません。然し心中誠に静かなるものが

あります。

正明は皇国防衛の前提として莞爾と

散って行きます。

国分農学校の当直室に此の書を進め

つつも、本城の家に帰っている様な気

がします。今夜の星は又、特に美しく

御両親の面影が目前にちらつきます。

桜花爛漫と咲き薫る南国を飛び立っ

て小生の故郷鹿児島を出撃の第一線に

為し得たる事は何にも代え難く喜しき

事です。

正明、桜花咲く靖国の社、智三人の

兄上の許に、そして親友松本峯一の居

る所に一足先に征きます。

御両親様の悲しみは小生にとつて最

も苦しい事です。正明は満足です。

今日は一時頃到着しましたが、業務

多繁、遂に連絡する暇がありませんで

した。お許し下さい。

父上にも母上にも現下、日本の現状

に既に覚悟ある事と思えます。日本は

皇国です。絶対不滅です。

我々は此の信念の下に生きて来まし

た。人類の正義の道を示すものは皇国

の道にあると思えます。書けば果しな

く思えば尽くる事もありません。

身を潔め心を静めて明日は南海に散

ります。父様、母様、末永く御身御大

切に。

小生と共に散る人は、兵学校出身高

橋中尉です。縁あらば宜敷くお願い致

します。

荷物は後の分は名古屋空第一十官次

室海軍少尉厚地兼之助氏か、川野良介

氏に頼んで置きました。連絡して見て

下さい。

遺髪とも云う可きものは残しません。

帽子、短剣を正明と思つて居て下さい。

部隊名 神風特別攻撃隊草薙隊海軍少尉

時 任 正明

(四月五日夜国分基地国分農学校の一

室にて書かれたものです。)

江沢敏夫

早大政経学部

第三草薙隊名古屋空海軍少尉24才

昭和20年4月28日南西諸島方面の敵艦船に特攻出撃戦死

九九艦爆搭乗



父治三郎氏に宛てた徳島空よりの葉書
拝啓 永らく御無音に打過ぎ大変失礼
致しました。

満二十三才の月日を迎へ皇国に育まれ

し天地の恩恵を感謝致し併せて御両親

様の御健康益々旺なることを御喜び申

上ます。

戦局益々多事多難、尋常一様な決意

にては、難局を切抜けうべからざる現

今、銃後隣組の緊張等又一段のことか

と推察致し御苦勞の段御察申上ます。

尚当地に於てはもう間近に桜等も咲

くべき気候にて北風の中にも春らしき

和やかな芽生へを見出しうる候になり

ました。あと僅かにて御役に立ちうる

様にと精一杯努力して居ります故御安

心下さい。秀夫も和人も元気でせうね。

秀夫は何処に決めましたか、早く吉報

御知らせ下さい。一年間の労苦を決す

る春、最後の努力を祈ります。では皆

様元気で御過ごし下さい。 敬 具



時 任 正明
第十三期飛行予備学生
第一草薙隊名古屋空海軍少尉 25歳
昭和20年4月6日沖繩沖敵艦船に特
攻出撃戦死九九艦爆搭乗

本日突然国分に進出、明日を期して
出撃します。名古屋より転出の途中、
本城の上を高度二千米にて通過しまし
た。感無量でした。敵来襲の頻化と皇
国の防衛に二十五年の運命を賭して立

出撃に際して特に遺書は残されていない。しかし、昭和20年5月11日の消印のある封書で、名古屋海軍航空隊第一士官次室の友人と思われる方から次の遺詠が父治三郎宛に送られている。

神風の吹けよぞかしと思う時
我が皇国の益良夫は征く



十三塚原特攻隊

姫路海軍航空隊跡 平和祈念の碑の除幕式と慰霊祭

山田 達雄

去る10月9日、兵庫県加西市の姫路海軍航空隊鷓野飛行場跡地に「平和祈念の碑」が建立され、除幕式と慰霊祭が挙行された。

姫路海軍航空隊は昭和18年練習航空隊として設立されたが、昭和20年2月全国の練習航空隊を統合した第10航空艦隊に編入され、全員特攻編制となり4月6日の菊水一号作戦から5月4日の菊水五号作戦まで、63名が沖繩周辺で散華した。

除幕式は定刻2時海上自衛隊呉音楽隊による国歌演奏の下に国旗が掲揚され、神官の祝詞奏上のおと式次第に従って除幕された。高さ13米の御影石に「姫路海軍航空隊鷓野飛行場跡」の銘と沿革、隊員名が刻まれた碑と「平和祈念の碑」が披露された。来賓の挨拶の後国旗を降納し3時式は終了した。

続いて慰霊祭に移り自衛隊のラッパ「君が代」吹奏の下、軍

艦旗が掲揚され儀仗隊による三発の甲銃が発射、参列者一同の玉串奉奠、その間音楽隊の演奏があり4時30分式を終了した。

参列者は遺族・旧搭乗員及び関係者、自衛隊、地元関係者等三五〇名余りで、国会議員二名、加西市長、県議員、阪市会議員、海上自衛隊呉地方総監、阪神地区隊司令、自衛隊兵庫県世話部長等が列席した。会場の天幕・椅子等の設営は主として海上自衛隊が担当したようである。



事務局より

○本年度会費二、〇〇〇円を同封郵便払込用紙を使って納入して下さい。

○当協会の会員は目下約三千人ほどで戦没特攻隊員の精神を後世に語り伝える為には会員の増加が必要なこと論を俟ちません。現会員の皆さんが一人入会させて下されば、会員数は忽ち倍になる訳でして、このようにねずみ算的に会勢の拡充をはかり度いと思えます。

入会希望者の住所氏名を御通知下されば、最近の会報に会費納入の郵便払込用紙を添えて送ります。

○前号に添えて協会発行の書籍等の購入申込葉書を発送しましたところ、多くの申込を頂きました。重ねてそれらを広告しますので、まだお持ちでない方はお申込下さい。代金支払の郵便払込用紙を同封して送ります。

- ・特攻隊遺詠集 二、〇〇〇円
- ・沖繩の空に消えた人のみ霊に捧ぐ／愛は終わり無く 一、五〇〇円
- ・特攻隊絵葉書8枚一組 四〇〇円
- ・特攻隊ビデオ二本建 五、〇〇〇円

(第一御楯隊・義烈空挺隊)

以上どれも送料別

昭和史の証言シリーズ(四)
映画上映会の報告

(大東亜戦争と国際裁判
・天翔る青春)

借行生涯学習塾 中江 仁(土61)

先に「特攻会報」第41号(11・11)

で予告した映画会は、直前に後援の産経新聞の推薦記事による連日の絶問ない問合せと、朝日新聞の批判反対記事「日の丸君が代のおしつけに反対する東葛の会」他4団体による、柏・松戸両市の教育委員会への後援取消しの執拗な抗議申し入れが報道された。亦当日、中核派の妨害行動が噂される等であって話題が盛り上がり、主催者としては期待と気遣いの一日であった。

当日、12月10日(金)は無事何事もなく、延入場者は予想を上廻る600名のぼり、感想文は106通の多くが寄せられた。

感想文は以下の通り特に若者のものを掲載するが、真剣にまともな事を教えれば、それに、まともに応えてくれる若者を見ると、祖国日本の偏らない歴史の絶え間ない地道な伝承こそが、真の英霊の鎮魂顕彰であることを、ここに改めて痛感した次第である。

貧者の投じた一石ではあるが、徐々

に波紋が消えることなく拡がって行くことを念願してやまないものである。ご来場の方々に感謝申し上げます。

感想文

句読点をつけただけで
他は原文のまま

●今の日本は戦争で死んでしまった人々たちによってあると思います。その死を無駄にしてはいけないと思います。日本のえらい人たちも、中国などから何をいわれようと、絶対にやす国神社へさんばいすべきです。今の日本の若い人たちは、もってピシッツとしなくてはならないと思います。(小学生)

●今日このえいを見にくるとき、どんなえいがあるのかなと思いついてみました。せんそうのえいがとしかきいていなかったが、ボクはこどもだしせんそうのことなどよく知りません。しゃっているといえは、B29が日本にきたなどそんなことをきいたぐらいです。しかしこのえいがをみて思いました「とってもれきしがかわったんだな」と、思いました。とてもいいんきょううになったな。(小五、男)

●愛国心、同胞愛に感銘を覚えました。それは国籍人種を問いません(青年)

●平和の大切さ、ありがたさ、そしてその重さを、あらためて感じました。

この日本、そして世界の平和をいつまでも真剣に考え守らなければいけないと思

ます。それが私達次の世代の義務責任でしょう。(青年、男)

●勝者が敗者をさばくことは許せない。(青年、男)

●「天翔る青春」はリアルに戦争を感じる事ができました。特に皆が「靖国神社で会いましょう」と言っている所が感動しました。「大東亜戦争と国際裁判」の方はA級の被告達が自らの立場を守り責任感の強さを感じました。いろいろな意味で元気が出た気が致します。今の日本の平和がこのような犠牲の上に成り立っていると考えると、もっと大事に生きなければならぬと思います。本日はありがとうございました。(柏市 伊藤昌輝 29)

●日本の正しい歴史を後世に伝えてゆく事は我々若い世代の努力が必要となるでしょう。今後も世代を超えて楽しめる上映会を希望します。(青年、男)

●「天翔る青春」は感動的で涙が出ました。日本に限らず一般庶民の犠牲はいたましい、今に生きる私たちはこの犠牲をむだにしてはいけないうつくづく思う。(青年)

●けんか両成敗なのの一方向的制裁に激しいきどおりを感じる。勝てば官軍負ければ賊軍、ひどすぎる。東京裁判をみて。(江面三郎 青年、男)

●何を書いたらいいのか言葉があまり浮ばずただただ涙があふれるばかりでした。私と同じ21才、10代20代の若者が多く国の為に、将来の日本の為に自らの命を絶ちました。私達は戦争を全く知りません。たとえ耳にすることがあっても実感がわきません。

しかしもし今戦争が起こったら、私達は国の為、親の為、兄弟姉妹の為たちあがることのできるでありましょうか。今の若者達にその勇氣と愛国心があるでしょうか。戦争は恐ろしく怖くつらいものです、でも実際におこった事は事実なのです。日本は間違っていたのでしょうか、私はそうは思いません。仕方がなかったのです。アメリカもイギリスも他の国々も間違っていないのです。誰にも人を裁く権利など持っていません。

今私と同年代の多くの若者が海外旅行に行き世界に進出しています。私も今年の夏オーストリアのウィーン大学に、ドイツ語を勉強に行きました。私は改めて日本の素晴らしさを学び実感しました。私達はもっと両親に、先生方に、友人に感謝すべきです。そしてもう一度自分の国を見直す時だと思います。私と同じ年でこの世を去ったすべての若者達の為にも。

教育委員会及び今回主催なさったかたがたに、もっとこのような場を若者達に与えて下さい、月に一回でも。若い世代がこのような映画を見る機会があったらと強く願います。(坂崎弥生 大学生、女21)

●歴史の真実を世に知らしめる努力を続けて下さい。(壮年、男)

●東京裁判は私たちの子孫代々に無効でいまいましいものだと言語伝えていく必要があると思います。(41才、男)

●貴重な映画の上映、本当に御苦労様です。もっと広く千葉各地で上映できることを望みます。(37才、男)

●日本の事実をいかに今に伝えるか、皆様の御活動に心より敬意を表します。この映画を多くの人に特に若い人に見てもらおうことが、教育にかかわる人の使命だと思ひます。魂を育てる歴史教育こそ大切だと思ひます。(壮年 男)

●東京裁判について、被告達は正しいと信じて進めた戦争が悲惨な結果になった責任を認めています。しよせん戦勝国が裁く裁判の限界を、最初から悟っていたのでしよ。全員が自己の信念に従ひ無罪を主張した点を評価したい。(壮年 男)

●日本の真実の歴史を知り、日本民族の魂を発揚せねばなりません。これは後に続く若い人によって引継がねばなりません。教育の改革に努力すべきです。(壮年 男)

●大そうすばらしい映画でした。今日の若者に是非見て欲しいと思ひます。祖国を思う心があれば、今日の日本の社会がもっともつよくなると思ひます。ありがとう御ございました。

●約半世紀前のこの史実を拝見し感無量でした。感動し身体がふるえ、又涙しました。真の反省か、前進か、平和の大切さと共に永遠の公平はありえないとも受取れました。日本を大切にし同胞を大切にすることが大事だと痛感しました。(壮年 男)

●「天翔る青春」については、視ていて何か涙が止まらず、自分でも不思議な思ひを感じてしまった。これは映像が真実を映しているからで、ヤラセではないからだと思ひます。というのも若者たちの遺書、遺言の

もつ迫力、そしてパラオの人達の歌声これら

を前にして心を動かさずにいられようか、と私は思ひます。このような催を計画して頂いたことは感謝します。

戦後五十年経って、そろそろ大東亜戦争の真実を我々国民一人一人が認識する時がきているものであり、その意味でこの企画は時宜にかなったものであるといえよう。これからの学校教育でも活用すべきと思われる。(増井久輝39才)

●大そう感銘を受けました。東京裁判のことをもっと勉強し、母親として子供たちに伝えてゆきたいと感じました。(主婦39才)

●プライドも親ましたが歴史の真実を知ることの大切さを感じました。一方的な見方でしか伝えられていないのが現状だと思ひます。子供に伝えていくという責任もありますので。(主婦37才)

●伝え続けねばならないことです。特に東京裁判はあのような形で決着し取り戻しはできません。せめて靖国神社参拝は当然のことと感じました。(壮年 女)

●内容は間違いなく事実なのです。学校などで見てもいい忘れないようにしていく必要があると思ひました。(壮年 女)

●本日は本当に有難う御ございました。清瀬弁護人の言葉を通じて、これまでの考えに對して日本の国の意義を認識しました。もう一度歴史を学び直そうと思ひています。(壮年 女)

●深く心打たれました。折にふれて父より聞かされておりましたことが、より深く理解でき、また父の願ひが解るような気がしました。歴史の真実が明らかにされ、日本

人としての誇りを取りもどし明るい希望に満ちた国になるように祈っています。このような映画会を度々催して頂きたいと思ひます。私共の子供達にも見せたいと思ひます。(壮年 女)

●多くの若者に感動を与えた映画「天翔る青春」のビデオ

日本会議で頒布しています

送料別五、〇〇〇円、特攻慰霊協会の会員だと言つて左記に申込み送つてくれます。目黒区青葉台3-10-1上毛ビル日本会議 03 王四木七-五六一一

いんたー

いんたー

いんたー



若潮会関東支部慰霊祭と

第三十三回総会

菊香る11月7日、若潮会関東支部総会を前に、靖国神社にて慰霊祭が行なわれた。10時30分迄に参集殿に集合する会員四十名余、11時過より神官の先導にて手水で身を清め拜殿へ向う。拜殿でお祓いを受けて回廊を迂回し御本殿へ「山の幸」の樂の内に、山の幸、海の幸の神饌が供えられ、神官の祝詞、濱野支部長の祭文、代表五名の玉串奉奠、二礼二拍手一礼ののち退出する。

その後、場所を九段会馆あかつきの間に移し総会、司会榎木氏の進行にて、まず黙禱ののち濱野支部長の挨拶、そして来賓として出席下された特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会の、最上理事長の挨拶があり祝電の披露、議長選出に移り、神尾氏を選出、神尾議長の下、議事に入り平成十一年度事業報告、十二年度事業計画可決、星会計幹事の会計報告、菊池監事の監査報告を承認、役員改選は、岡田監事の体調不良との事で、宮島氏を選出し議事終了、しばし休息ののち懇親会に入り、大いに歓談し、最上理事長を中心に写真撮影等を行い、二時半頃散会をした。

平成11年度回天烈士並びに 回天搭載戦没潜水艦乗員の追悼式

日時：平成11年11月14日

一三三〇／一五〇〇

場所：徳山市大津島 回天記念館

回天碑前

小灘利春

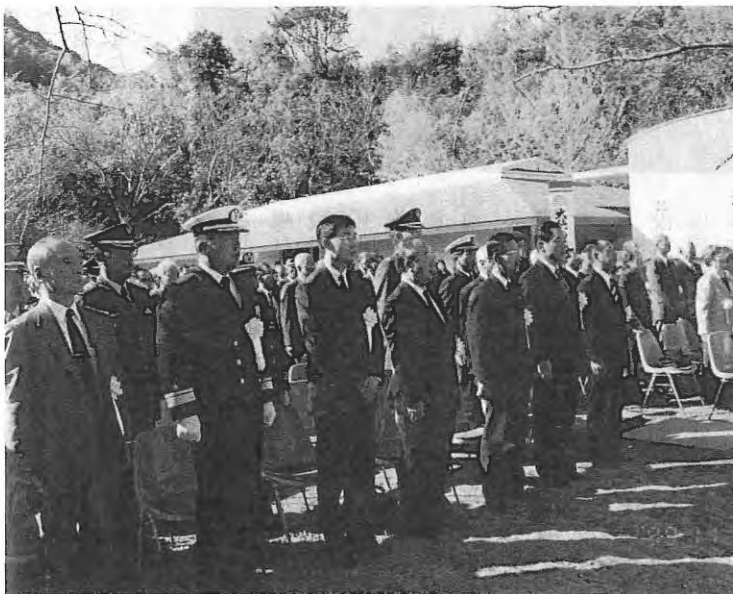
瀬戸内海に面する山口県徳山市の大津島は、人間魚雷「回天」搭乗員の操縦訓練のため九三式酸素魚雷の試射場を活用して最初に基地が開設された場所であり、「回天搭乗員の「メッカ」となっている。慰霊祭が戦後の昭和30年以来毎年、地元有志によって執り行われており、11年度は11月の第二日曜日、14日に戦没回天搭乗員一〇六名ほか隊員、ならびに回天を搭載して出撃し還らなかった潜水艦八隻の乗員八一〇名を追悼する式典が開催された。

大津島の「回天記念館」は地元有志の団体「回天顕彰会」が募金運動を達成し、昭和43年に建設を終えて徳山市に寄付したものであるが、徳山市は昨年大幅な改装増築を施して再開館した。市が建造した高速旅客船が徳山湾内の直航便に就航し、交通の便が改善されたこともあって、参観者が増加してい

るといふ。追悼式は13時30分より厳粛に執り行われた。御遺族約四〇名が北海道から九州までの全国各地から参加され、山口県、徳山市ほか各種自治体、国会議員、海陸空各自衛隊の代表、地もと諸団体、会社、有志、旧軍関係者など多数が参列した。回天の創始者である故・黒木博司少佐の妹丹羽教子様の御姿が本年も見えたほか、初参加された御遺

族も少なくなかった。海上自衛隊の潜水艦一隻が入港し、制服姿の乗員が整列して式典に参加し、慰霊飛行の海上自衛隊の飛行艇一機および航空自衛隊の練習機一編隊が式典の最中、低空で上空を飛行した。真つ黒な回天の実物大模型の前で、若人たちの恒例の「大徳山太鼓・回天」が演奏され、力強い太鼓の音が響きわたった。

回天記念館の新しい展示方式は概ね歓迎されているが、特に視聴覚コーナーの二篇の解説ビデオが好評とのことである。徳山市は今後の記念館運営方針として回天戦没者の遺品、遺筆などの永久保存と展示にとどまらず、広く関連事項の調査を進め、図書、資料などの収集をはかって、この地が回天に関する情報の発信源になることを計画している。今後の発展が期待される。



特攻会報 11~41号 総目録

会報号数順に次の区分に分類し、記事の載っているページを明示した。標題については概ね会報にある通りにしたが、紙面節約のため簡略にしたものもある。

行事の予告等は削除した。

協会主催(協賛)の慰霊祭

各地の慰霊顕彰行事

航空特攻(対艦船)

航空特攻(対B29)

空挺特攻

特潜

回天

伏竜

震洋

陸軍船舶特攻

少飛

学徒兵・特操・幹候・海軍予備学生

知覧関係

遺書・遺詠等

論文、随想等

その他(右の区分に入らぬものや、どの区分にあるのか判断に迷うようなもの)

各地の慰霊顕彰行事の区分に入れた記事は、他の分類の該当所に重ねて記入したが、慰霊祭以外の記事は、原則としてどれかの区分一個所だけに記入した。但し探し易くする為二個所に入れた

ものもある。

協会主催(協賛)の慰霊祭

実施の度ごとに必ず記事が出ているので、ここに一括した。初の数字は会報の番号、()内は発行年月、次の数字は掲載のページ、但し記入していないのは第1ページである。

靖国神社における特攻隊合同慰霊祭

11 (2・8) 13 (3・7) 15 (4・7)

17 (5・8) 19 (6・5) 今回だけは千鳥湖

23 (7・5) 28 (8・8) 31 (9・5)

35 (10・5) 39 (11・5)

世田谷特攻観音年次法要

12 (3・2) 14 (4・1) 16 (5・3)

18 (5・12) 21 (6・11) 4 25 (7・11)

29 (8・11) 33 (9・11) 37 (10・11)

41 (11・11)

各地の慰霊顕彰行事

号 発行年月 頁 標題

11 (2・8) 2 震洋隊川棚「特攻殉国の碑」

11 4 義烈空挺隊慰霊祭

11 8 知覧特攻隊基地慰霊祭

11 21 少飛会慰霊祭

12 (3・2) 16 徳山市回天大祭

12 17 岩佐中佐五十回忌慰霊祭

12 18 「少飛の塔」点眼・落慶・慰霊祭

12 19 幹候9期菊池会慰霊祭

12 21 予科練戦没者慰霊祭に参列して

12 22 「空」の墓慰霊祭

12 23 川南護国神社例祭

13 7 全陸軍航空部隊前祭

13 21 陸軍水上特攻の慰霊祭

13 30 知覧特攻基地戦没者慰霊祭

13 32 義烈空挺隊慰霊祭

14 14 特潜碑頭彰祭

14 14 特操之碑頌徳祭

14 20 白鷗遺族会慰霊祭

14 21 高野山「空」の墓慰霊祭

14 21 川南護国神社例祭

14 24 菊池会仙台護国神社で慰霊祭

15 4 知覧特攻基地戦没者慰霊祭

15 15 白鷗遺族会戦没者慰霊祭

15 24 義烈空挺隊慰霊祭

16 20 予科練慰霊祭に参拝して

16 20 白鷗遺族会慰霊祭に参拝して

17 4 知覧特攻観音慰霊祭

17 8 回天会下呂全国大会

17 13 海上挺進戦隊戦没者慰霊祭

17 16 特潜碑頭彰祭

17 24 特攻艦隊留魂碑建立

17 24 震洋慰霊祭

17 24 万世特攻館落成と慰霊祭

18 18 知覧特攻観音慰霊祭

18 23 特操之碑頌徳祭

18 11 万世慰霊祭

19 16 川南護国神社例祭

19 20 若潮の塔慰霊大祭

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------|-----------------|-------------|----------------|-------------|------------|----------------|----------------|----------------|---------------|---------------|---------------|---------------|-----------------|----------------|----------------|-----------------|----------------|-----------------|-----------------|----------------|----------------|---------------|--------------|---------------|----------------|-----------------|-------------|-----------------|
| 37 | 36 | 36 | 36 | 35 | 35 | 32 | 32 | 32 | 32 | 31 | 30 | 30 | 29 | 28 | 28 | 26 | 26 | 26 | 25 | 24 | 24 | 24 | 24 | 24 | 23 | 22 | 22 | 21 |
| (10・11) | | (10・8) | | (10・5) | | | | (9・8) | (9・5) | (9・5) | (9・2) | (8・11) | (8・8) | | (8・8) | | (8・2) | (7・11) | (7・11) | | | | (7・8) | (7・5) | (7・5) | (7・2) | | |
| 23 | 26 | 24 | 5 | 16 | 15 | 16 | 14 | 7 | 2 | 24 | 25 | 23 | 14 | 22 | 10 | 21 | 20 | 18 | 9 | 10 | 7 | 5 | 4 | 1 | 16 | 5 | 1 | 17 |
| 繪葉書発行に因んで⑤沖繩戦 | 嗚呼五月四日 | 「米軍写真」特攻機突入 | 「知覧特攻基地」より④ | 腸隊 | 有馬正文少将の体当り | 郷土紙より 特攻隊員千田孝正 | 少年特攻隊員千田伍長と少女達 | 硫黄島作戦における第二御楯隊 | ある特攻隊員の母の手記 | 鹿屋基地の花「特攻花」 | 靖国神社報技「知覧のこと」 | 新田原方面8FDの沖繩特攻 | 「知覧特攻基地」より③ | 第50振武隊出撃の模様 | 「知覧特攻基地」より② | 大日本青年航空団とは | 再び岡部三郎君のことについて | 米軍の記録 特攻生還に光 | 「知覧特攻基地」より① | 解説・特攻攻撃隊オールネビー | 青航一期生岡部三郎君特攻出撃 | 特攻隊の思出(少飛13期) | 記憶に残る万葉隊のこと | 神風敷島隊軍神の絵 | 特攻基地徳之島に空中補給 | 往時の新聞記事に見る特攻隊 | 沖繩航空特攻戦 | 「白雲にのりて君還りませ」より |
| 30 | 30 | 30 | 29 | 29 | 28 | 28 | 27 | 25 | 24 | 23 | 23 | 23 | 23 | 20 | | | | 20 | 16 | 16 | | | | 41 | 40 | 38 | 38 | 38 |
| | | (9・2) | | (8・11) | (8・8) | (8・4) | (7・11) | (7・8) | (7・8) | (7・5) | (7・5) | (7・5) | | | | | | (6・8) | (5・3) | (5・3) | | | | (11・11) | (11・8) | (11・2) | (11・2) | (11・2) |
| 17 | 14 | 3 | 26 | 18 | 14 | 4 | 21 | 2 | 11 | 9 | 7 | 5 | 11 | | | | 7 | 18 | 9 | 9 | | | 26 | 18 | 16 | 12 | 2 | 2 |
| マリアナに対する経空攻撃④ | 小林軍曹機51年8ヶ月目の掘起 | B29に対する体当り② | 敵大型機に対する零戦の体当り | B29に対する体当り① | 知覧特攻基地慰霊祭 | マリアナに対する経空攻撃② | マリアナに対する経空攻撃① | 震天制空隊 | 海軍航空の敵大型機に体当り | 村田勉少尉 | 山本三男三郎大尉 | 野辺重夫准尉・高木伝蔵軍曹 | B29に体当りした人々 | 高木軍曹、村田曹長、山本少尉 | 浦井中尉、幸軍曹、野辺准尉、 | 吉沢中尉、山本中尉、中川中尉、 | B29に体当りした人の碑、 | B29に体当りした吉沢平吉中尉 | B29に体当りした吉沢平吉中尉 | 第1第2御楯隊と硫黄島の碑 | 第1第2御楯隊と硫黄島の碑 | | | 福山正道少佐の出撃(続) | 神風特攻隊福山正道少佐の出撃 | 朗読劇 沖繩はるかに | 石陽隊井樋太郎少尉の詩 | 忘れ難い人達 石陽隊の17人 |
| 22 | 22 | 22 | 22 | 21 | 20 | 19 | 19 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 13 | 12 | 12 | 12 | 11 | 11 | 11 | | | | 35 | 35 | 33 | 32 | 31 | 31 |
| | | (7・2) | (7・2) | (6・11) | (6・8) | (6・5) | (5・8) | (5・3) | (5・3) | (4・7) | (4・1) | (4・1) | (3・7) | (3・7) | (3・2) | (3・2) | (2・8) | (2・8) | | | | | | (10・5) | (9・11) | (9・8) | (9・5) | (9・5) |
| 21 | 18 | 11 | 7 | 24 | 22 | 22 | 17 | 20 | 19 | 24 | 21 | 32 | 22 | 23 | 22 | 4 | 4 | 4 | 10 | | | | 24 | 3 | 4 | 25 | 10 | 2 |
| 高千穂部隊のタクロバン攻撃隊 | 高千穂降下部隊を讃える歌 | 薫空挺隊 | 後世に史実を伝える碑文 | 高野山空挺墓前祭 | 義烈空挺隊碑前祭 | 義烈空挺隊員の遺書 | 油絵17点を川南町に寄贈 | 川南護国神社例祭 | 読谷飛行場跡に立ち偲ぶ | 沖繩摩文仁の碑前に油絵展示 | 義烈空挺隊慰霊祭 | 義烈空挺隊慰霊祭 | 挺進飛行第2戦隊三浦中隊(続) | 特攻隊員の死生観―義烈隊員 | 川南護国神社例祭 | 高野山「空」の墓慰霊祭 | 挺進飛行第2戦隊三浦中隊 | 義烈空挺隊慰霊祭 | 全日本空挺同志会 | | | | 第一御楯隊ビデオの解説文 | マリアナに対する経空攻撃⑦ | マリアナに対する経空攻撃⑥ | B29に体当り生還した坂本曹長 | B29に対する体当り③ | マリアナに対する経空攻撃⑤ |

航空特攻(対B29)

空挺特攻

27 (8・4) 海上挺進特別研究部の創設
 30 (9・2) 海上挺進戦隊慰霊祭
 34 (10・2) 海上挺進戦隊慰霊祭

少飛

12 (3・2) 「少飛の塔」点眼・落慶・慰霊祭
 13 (3・7) 少年特攻隊員を見送った二女性
 14 (4・1) 特攻隊員の遺書
 15 (4・7) 特攻隊員の思出
 17 (5・8) 特攻隊員の手記
 18 (5・12) 特攻隊員の手記
 24 (7・8) 特攻隊の思出
 32 (9・8) 千田孝伍長に感銘した少女達
 36 (10・8) 少飛特攻隊員の遺書
 19 滝口泰弘捕虜收容所脱走記

知覧関係

11 (2・8) 知覧特攻基地戦没者慰霊祭
 11 30 ホタルになった兵隊
 13 (3・7) 知覧特攻基地戦没者慰霊祭
 15 (4・7) 知覧特攻基地戦没者慰霊祭
 15 (5・8) 鳥浜トメさんの町葬
 18 (5・12) 知覧特攻観音慰霊祭
 18 4 知覧特攻観音慰霊祭
 19 19 知覧随想
 20 (6・8) 知覧特攻基地慰霊祭
 25 (7・11) 「知覧特攻基地」より①
 24 9 知覧特攻基地慰霊祭

28 (8・8) 「知覧特攻基地」より②
 28 14 知覧特攻基地慰霊祭
 29 (8・11) 「知覧特攻基地」より③
 30 (9・2) 知覧のこと
 31 (9・5) 知覧特攻会館に仏像奉納
 32 (9・8) 知覧特攻戦没者慰霊祭
 36 (10・8) 「知覧特攻基地」より
 38 (11・2) 特攻おばさんは語る
 40 (11・8) 知覧特攻基地慰霊祭

学徒兵 特操 幹候 海軍予備学生

11 (2・8) 幹候九期(操縦)の会
 12 (3・2) 幹候九期菊池会慰霊祭
 14 (4・1) 船舶特幹二期生の集い
 14 20 特操之碑頌徳祭
 14 24 菊池会仙台護国神社で慰霊祭
 14 24 操幹一期会発足す
 15 (4・7) 護国隊牧野顕吉君を学友が語る
 18 (5・12) 「出陣学徒壮行の地」碑
 18 23 特操之碑頌徳祭
 21 (6・11) 学徒出陣回想
 24 (7・8) 甲種幹部候補生特攻戦死者調査
 26 (8・2) 特集特操二期①
 26 12 特捜之碑頌徳祭
 27 (8・4) 特集 特操二期②
 27 15 特操一期多々良少尉の母の手記
 32 (9・8) 特攻隊員(予備学生)母の手記
 38 (11・2) 二つの鎮魂碑

遺書遺詠等

11 (2・8) 若杉是俊日記抄
 14 (4・1) 特攻隊員の遺書
 16 (5・3) 出撃直前までの手記
 17 (5・8) 故田所昇兄の遺書
 17 9 特攻隊員の手記(宮之原伍長)
 18 (5・12) 特攻隊員の手記
 28 (8・8) 回天特攻隊員の出撃日記
 30 (9・2) 誠36、37、38特攻隊員の寄書
 34 (10・2) 小林敏男大尉の遺稿
 35 (10・5) 愛児に残した手紙
 36 (10・8) 少年飛行兵特攻隊員の遺書
 37 (10・11) 若杉是俊少尉の日記
 37 17 佐藤新平曹長の日記
 37 20 殉義隊敦架良二中尉のこと
 40 (11・8) 我子に与えた遺書三題
 40 2 特攻隊員の日記①原町の本より
 41 (11・11) 原田葉少尉の句
 41 8 みたま祭懸雪洞にみる遺詠
 41 遺書遺詠にみる靖国神社

論文・随想等

13 (3・7) 特攻隊員の死生観
 14 (4・1) 特攻を支えた魂
 14 17 ある老婦人からの手紙
 14 18 感銘を覚えた意見発表
 15 (4・7) 九つの鉦を叩く
 15 「特攻」を読んで

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|------------|------------|-------------|-----------------|------------|----------------|--------------|---------------|-----------------|---------------|--------|---------------|----------------|----------------|-----------------|---------------|----------------|----------------|---------------|-----------------|---------------|--------------|-------------|----------------|---------------|-----------------|-----------|
| 33 | 33 | 33 | 32 | 32 | 31 | 31 | 31 | 30 | 28 | 28 | 27 | 27 | 26 | 25 | 25 | 24 | 24 | 23 | 20 | 19 | 18 | 17 | 17 | 16 | 16 | 15 | 15 |
| | | (9・11) | | (9・8) | | (9・5) | (9・2) | | | (8・8) | (8・4) | (8・2) | | (7・11) | (7・8) | (7・5) | (7・5) | (6・8) | (6・5) | (5・12) | (5・8) | (5・3) | | (5・3) | | | |
| 23 | 22 | 19 | 24 | 18 | 22 | 21 | 18 | 2 | 26 | 8 | 20 | 1 | 16 | 23 | 14 | 22 | 10 | 14 | 15 | 18 | 8 | 17 | 22 | 22 | 21 | 22 | 15 |
| 特攻隊絵葉書発刊に因んで① | 怨親平等の観音隊 | 学徒動員の思出 | 愛媛玉串料訴訟違憲判決 | 反日歴史教科書の是正について① | 特攻の心 | 愛媛玉串料訴訟の最高裁判決 | 日頃思っていること | 開戦記念日十二月八日の意義 | 「特攻隊史研究の一視点」に關し | 特攻隊員の心 | 英霊は語る | 靖国神社公式参拝の問題 | 特攻隊史研究の一視点 | 大東亜戦争の語源 | 常軌を逸した戦後50年国会決議 | 昭和殉難者と吉田松陰言行録 | 解説・特別攻撃隊 | 大東亜戦争開戦記念日の認識 | 特攻隊員指名は命令か志願か | 特攻随想(第四話) | 特攻随想(第三話) | 黒潮に逝く | 特攻随想(第二話) | 特攻随想(第一話) | 山県大式先生の絵とわが遺書 | 特攻戦死した同期生 | 散華 |
| 18 | 18 | 16 | 15 | 15 | 14 | 14 | 13 | 13 | 12 | 11 | 11 | | | 40 | 40 | 39 | 38 | 38 | 37 | 36 | 35 | 35 | 34 | 34 | 34 | 34 | 33 |
| | (5・12) | (5・3) | (4・7) | (4・7) | (4・1) | (4・1) | (3・7) | (3・2) | (3・2) | (2・8) | | | | (11・8) | (11・8) | (11・5) | (11・2) | (11・2) | (10・11) | (10・8) | (10・5) | (10・5) | (10・2) | (10・2) | (10・2) | | |
| 24 | 5 | 16 | 11 | 1 | 20 | 17 | 28 | 16 | 15 | 13 | 9 | 6 | | 22 | 20 | 19 | 21 | 1 | 23 | 23 | 23 | 2 | 17 | 9 | 1 | 25 | |
| 財団法人認可さる | 八月十五日の靖国神社 | 六月十一日の再会 | 会員の描いた特攻隊 | 竹田会長御逝去 瀬島会長就任 | 特攻観音の合祀霊名簿 | ある老夫婦からの手紙 | 三ヶ根山比島観音に詣でて | イリサンの戦車特攻 | 特攻隊員遺族に送る録音テープ | 昭和天皇独白録中の特攻関係 | 私共の団体 | 「特別攻撃隊」出版 | | 本土決戦における特攻作戦準備 | 後に続くを信ずと言った人に | 青年勉強会における講話 | 知覧よ | 記念すべき十二月八日 | 特攻隊絵葉書発刊に因んで⑤ | 特攻隊絵葉書発刊に因んで④ | 特攻隊絵葉書発刊に因んで③ | 靖国神社について思うこと | 特攻隊のビデオを見て | 特攻隊絵葉書発刊に因んで② | 平成「離騒」編 | 反日歴史教科書の是正について② | |
| 33 | 32 | 32 | 31 | 29 | 29 | 29 | 28 | 28 | 28 | 28 | 28 | 27 | 26 | 25 | 25 | 25 | 25 | 25 | 25 | 24 | 24 | 24 | 23 | 21 | 21 | 20 | 20 |
| (9・11) | (9・8) | (9・5) | (8・11) | | (8・11) | (8・11) | (8・8) | (8・8) | (8・8) | (8・8) | (8・4) | (8・2) | | | | | | | (7・11) | (7・11) | (7・8) | (7・5) | (6・11) | (6・11) | (6・8) | (6・8) | |
| 2 | 28 | 22 | 25 | 28 | 5 | 4 | 28 | 24 | 23 | 15 | 15 | 1 | 1 | 23 | 23 | 21 | 18 | 15 | 14 | 22 | 17 | 14 | 3 | 1 | 2 | 1 | |
| 八月十五日の靖国神社 | 軍事史日録 | 昭和殉難者碑前祭二題 | 建国記念日中央式典 | 宝塚遺徳顕彰会慰霊祭 | 八月十五日の靖国神社 | 靖国神社みたま祭の起源と現況 | 陸軍航空部隊碑前祭 | 寺崎名誉会長をしのぶ | 寺崎名誉会長逝去 | 英霊にこたえる会総会 | 興亜観音例祭 | 殉国沖繩学徒顕彰五十一年祭 | 大東亜戦争忠霊顕彰五十四年祭 | 大東亜戦争の語源 | 天皇陛下全国護国神社に幣帛料 | 八月十五日の靖国神社 | 政府主催慰霊祭天皇陛下御言葉 | 宝塚「大光明殿」縁起と慰霊祭 | 戦没者追悼式村山首相の式辞 | 常軌を逸した戦後50年国会決議 | 昭和殉難者と吉田松陰 | アジア共生の祭典 | 戦争謝罪国会決議許さぬ | 政府主催の戦没者追悼に物申す | 八月十五日の靖国神社 | 「特別攻撃隊」顕彰譜補遺 | 靖国神社春季例大祭 |

その他(右の区分に入らぬもの)

| | | |
|----|----|---------------|
| 33 | 3 | 真の宗教人 |
| 34 | 16 | 我が協会作成のビデオ |
| 34 | 27 | 戦没者慰霊画展示の報告 |
| 35 | 10 | 特攻資料展 |
| 36 | 1 | 靖国神社例大祭 |
| 36 | 19 | 捕虜収容所脱走始末記 |
| 36 | 26 | 富嶽隊遺族みたま祭献灯 |
| 37 | 3 | 八月十五日の靖国神社 |
| 37 | 13 | 特攻烈士の遺髪遺族のもとへ |
| 37 | 25 | 茨城県護国神社で絵画展 |
| 37 | 26 | 樺太真岡郵便局女性交換手 |
| 39 | 13 | 建国記念日奉祝中央式典 |
| 39 | 14 | 特攻勇士之像完成 |
| 39 | 15 | 遺族探しに御協力を |
| 40 | 21 | 特攻鎮魂歌と歌手 |
| 40 | 27 | アメリカ取材報告 |
| 41 | 2 | 八月十五日の靖国神社 |
| 41 | 28 | 図書紹介4件 |

詩歌

歌の含まれている記事の標題を()で記載した。題のついていない歌は記事の標題のみ。

| | | |
|----|----|----------------|
| 12 | 15 | 富嶽隊遺族作の俳句と短歌 |
| 12 | 15 | (特攻隊員の遺族に送る録音) |
| 12 | 23 | 述懐(川南護国神社例祭) |
| 13 | 3 | (全国特攻戦没者合同慰霊祭) |
| 13 | 6 | あ、義烈空挺隊 |

| | | |
|----|----|------------------|
| 13 | 31 | (特攻隊員の死生観) |
| 13 | 31 | 噫々知覧特攻隊 |
| 14 | 1 | (第37回知覧特攻基地慰霊祭) |
| 14 | 2 | 特攻慰霊の歌/森武次 |
| 14 | 2 | 自由詩 |
| 14 | 3 | 短歌/高瀬武甫 漢詩/今村浩 |
| 15 | 3 | (第40回特攻観音年次法要) |
| 15 | 3 | 噫一誠特別攻撃隊/津留敦 |
| 15 | 3 | 特攻出撃の歌/森武次 |
| 15 | 11 | (特攻会同慰霊祭) |
| 15 | 11 | 炎の特攻隊/西野弘二 |
| 17 | 1 | (会員の描いた特攻隊) |
| 17 | 1 | (特攻隊合同慰霊祭) |
| 18 | 1 | (第42回特攻観音年次法要) |
| 18 | 19 | 祈る/工藤鉄太郎 |
| 18 | 19 | (会員から寄せられた歌) |
| 19 | 15 | (宮崎特攻基地の碑) |
| 19 | 16 | 戦友の捧げた歌 |
| 19 | 16 | (川南護国神社例祭) |
| 19 | 23 | 憂国詩/木住野哲男 |
| 21 | 4 | 魂の声 |
| 22 | 18 | (第43回特攻観音年次法要) |
| 22 | 18 | 高千穂降下部隊を讃える歌 |
| 25 | 1 | 感懐(第44回特攻観音年次法要) |
| 25 | 19 | 戦友が墓前に捧げた歌 |
| 28 | 3 | (先工)の墓前祭 |
| 31 | 3 | 追想特別攻撃隊 |
| 31 | 21 | 憂憤歌七首 |
| 32 | 22 | 戦犯の歌/沢栄作 |
| 32 | 22 | (昭和殉難者碑前祭) |

| | | |
|----|----|----------------|
| 12 | 15 | 富嶽隊遺族作の俳句と短歌 |
| 12 | 15 | (特攻隊員の遺族に送る録音) |
| 12 | 23 | 述懐(川南護国神社例祭) |
| 13 | 3 | (全国特攻戦没者合同慰霊祭) |
| 13 | 6 | あ、義烈空挺隊 |

挿絵及びカット

記事の題名を示す。記事を掲載する為に書いたもので、既に書かれていたものを写真の代りに出したのは除く。

| | | |
|----|----|--------------|
| 33 | 1 | つるの懐い |
| 34 | 23 | (川南護国神社例祭) |
| 38 | 12 | (井樋太郎少尉の歌) |
| 39 | 1 | 戦没特攻隊員鎮魂歌 |
| 40 | 28 | 短歌で偲ぶ陸軍挺進部隊史 |
| 41 | 4 | 原田某少尉遺詠 |
| 41 | 4 | 石川誠三中尉遺詠 |
| 41 | 5 | 昭和殉難者遺詠 |
| 41 | 8 | 遺書遺詠にみる靖国神社 |
| 11 | 15 | ホタルになった兵隊 |
| 11 | 21 | 若杉是俊日記抄 |
| 12 | 3 | 特攻観音年次法要 |
| 12 | 9 | 伏竜訓練余話 |
| 12 | 15 | カット |
| 12 | 21 | カット |
| 13 | 15 | 伏竜部隊の訓練と反省 |
| 13 | 25 | 挺進飛行第2戦隊三浦中隊 |
| 15 | 15 | カット |
| 16 | 7 | 阿部編隊の空母体当り |
| 16 | 8 | 神州不滅特攻隊 |
| 16 | 13 | 天山隊 |
| 16 | 16 | 出撃直前までの手記 |
| 18 | 7 | 飛竜雷撃隊 |

- 19 (6・5) 4 南九州航空碑
- 20 (6・8) 14 浦井俊郎中尉
- 23 (7・5) 11 回天制空隊
- 26 (8・2) 19 カット
- 27 (8・4) 13 カット
- 30 (9・2) 21 第1御楯隊
- 36 (10・8) 14 18 少飛特攻の遺書
- 36 22 捕虜収容所脱走始末記
- 38 (11・2) 17 18 19 20 沖繩はるか

靖国神社合同慰霊祭

(3年3月)

ここに11号から41号までの記事の総目録を作成したので、切取って活用し易いように21頁から28頁迄に割付けてみた。同類のものも考えているので、御希望や御意見があればお寄せ頂きます。

以下数篇の歌を掲げるが、これは既に掲載済みのものであり、この頁の余白を埋める為で他意はない。

庭の梢で咲いて会とおと

語りしところ雲はるか

澄み通るたる眼差しは

交となりて砕けたり

宮居に響く拍手は

み霊を呼ぶかほの暗き

灯かすかにまたたきて

幽明の境消えんとす

萌ゆるが如き春草の

君が面影変らねど

老醜の身は秋たけて

四十余年の夢遠し

(5年6月)

明治の帝の勅まこと

承けて築きしこの社

齋き祀りし神々の

御前額突く白き鬢

庭の梢で咲いて会とおと

誓いし友は神あがり

匂うが如き若武者の

永久に変わらぬ軍神

手拍子とりて歌いたる

友の横顔憶いつ、

我が拍手は奥宮に

軍歌の響きと届けまし

お国の為ということの

絶えて久しき戦後史に

既倒に廻らすこの祭

老兵の正気なお存す

特攻観音年次法要

(7年9月)

観音堂の 鐘を突く

渾身の力をこめて

撞木が鐘に衝る勢に

特攻機突入の思いがある

嫺々とした余韻は

神となった特攻隊員の

清浄な心

杜の梢に 蝉の声を聞く

何年も地に潜み

世に出たら木のつゆを吸い

やがて死んでゆく

高潔なその生涯

特攻隊員の心か

観音様の姿 柔和なその容貌

ある写真に見た

出撃前の少年隊員の顔を憶う

あの人達

そのとき既に観音様だったのか

手を合せて拝む 老兵の横顔

霜頭爛額 彫りは深い

あるとき死すべき命 長らえて

脛に友と合う この庭で

噫々 知覧特攻隊

(3年4月)

国難迫る沖繩に

悲報は櫛の歯を引きて

狂乱既倒必殺の

夷狄に加えん鉄槌を

嵐に散るか桜花

我が選びたる道なれや

夕陽沈む五月空

脛に浮ぶ故郷の

尽きぬ思いを断ち切りて

身辺清し 一封に

万斛の情折込みて

言ひ残すこと既になし

黒潮洗う薩南の

緑滴るこの大地

祖霊まします大八州

愛しき人よ同胞よ

双肩に負い我は征く

さらば幸あれいざさらば

御霊に捧ぐ一輪の

菊花に寄する我が念おもい

「同期の桜」高誦して

遙かな空に雲流れ

頬に流る、涙あり

噫々知覧特攻隊